



第三号

平成 29 年 5 月 1 日
大アジア研究会

〒 2790002 千葉県浦安市
当代島 1-3-29 アイエムビル 5 F (☎ 047-352-1007)

代表 折本龍則
副代表 小野耕資
顧問 坪内隆彦

朝鮮危機に際して、 アメリカの「人道」主義を排す

トランプ政権発足から百日。目下アメリカは、イスラム国の掃討作戦を続けているが、そもそもイスラム国を生み出したのはアメリカ自身であることを忘れてはならない。周知の様に、イスラム国は、アメリカによって打倒されたサダム・フセイン体制の残党が母体になったとされる。アメリカはサダム・フセインがアルカイダの指導者であるビンラディンを匿っているという言い掛かりを付けてイラクを攻撃したが、そもそもアルカイダを生み出したのもアメリカ自身である。ソ連のアフガン侵攻に対抗してアメリカがビンラディンに武器や資金を援助したことがアルカイダの台頭をもたらしたとされる。

イスラム国の掃討にはロシアやイランとの協力が不可欠であるが、アメリカはアサド政権がサリンを使用したことへの「人道的」な反発からシリアを空爆し、アサド政権を支援するロシアとの関係が険悪化した。またイラ

ンに対しても、オバマ政権時代に結ばれた核合意を再検討し、経済制裁の復活を示唆している。

どれも場当たり的で戦略目標が散漫であり、一体何をしたいのか分からない。それは対北朝鮮外交についても同様だ。アメリカは北朝鮮へ圧力を強め、武力行使をも辞さない強硬姿勢で核開発の放棄を要求しているが、むしろ北朝鮮はシリア問題で米露関係が悪化したのを良いことにロシアとの経済連携を強化し、万景峰号がロシア極東と北朝鮮を結ぶ定期船として就航することが決まった。これに対して、トランプ政権は、中国に対北制裁での協力を求めているが、北朝鮮をアメリカとの緩衝国と位置付ける中国に、もとより金正恩体制を打倒し、朝鮮半島を無用な混乱に陥れる意思など毛頭ない。

米中接近によって梯子を外されるのは他にもない、我が国日本だ。政権発足当初こそ、対中強硬外交を主張していたトランプ政権であるが、ロシアと仲違いすると今度は対中宥和策に転じ、為替や安保問題での譲歩を迫られるだろう。またその一方で、相対的に戦略

的価値が低下した我が国に対しては、態度を硬化させ、先日始まった「日米経済対話」などの場で、TPP以上の露骨な市場開放圧力を加えてくる可能性が高い。

想えば現下の国際情勢は、ニクソン政権時の東アジア情勢と似ている。ニクソンはベトナム撤兵を進めるなかで、ソ連との対立を深める中国に接近する一方で、我が国に対しては露骨な軽視政策に転じ、日米繊維交渉等での攻勢を強めた。こうしたなかで、当時の佐藤政権は、秘密裏に核武装の可能性を検討し、佐藤政権の通産大臣で、佐藤首相の跡を継いだ田中角栄は、独自のウラン調達ルートを構築して対米自立の道を模索した。しかし、角栄の挫折は対米従属派の勝利であり、八十年代に復活したアメリカに対して我が国は底無しの従属構造に陥ったのである。

言うまでもなく、北朝鮮の核・ミサイル開発は我が国の安全保障に対する重大な脅威であるが、アメリカによる如何なる妨害によっても北朝鮮の核開発を止める事は出来ない。仮にアメリカの北朝鮮侵攻によって金正恩体制が崩壊したとしても、その後当然に予想される核の拡散や難民の流出、中共勢力の浸潤といった朝鮮情勢の混乱はアメリカにとっても我が国にとつても決して望ましいものではない。

トランプ政権の対北強硬政策は、トランプが、金正恩による兄正男の暗殺の残酷さに憤激したのがきっかけとされ、シリア空爆を決

めたのも、愛娘のイバンカがアサド政権によるサリン攻撃の残虐性をトランプに訴えたのが発端とされるが、トランプは上述した様なアメリカ外交の失敗が、アメリカの戦略的利益と、「人道」という道義的な価値の混同によるものであることを学習すべきだ。

確かに金正恩は残酷な独裁者であるに違いないが、国民の経済利益を犠牲にしても核開発を優先し、国家独立の根基を確立する事は、長期的には合理的な選択であり狂気の沙汰とは言えない。現在の中国も大躍進政策の最中、膨大な自国民の餓死者を出しながらも核開発に邁進し、米ソに対する国家独立の基を確立した後に経済の改革開放に舵を切った事で大国の地位を勝ち取った。金正男が代弁した北朝鮮の改革開放は、国家の権力基盤が脆弱な状態で実施すれば体制崩壊に繋がりがかりかでない。

それに、曲がりなりにも現在の北朝鮮は、朝鮮の宿願ともいえる事大主義からの脱却と自主強盛大国への道を目指している。これに対して、我が国は相変わらずの対米従属と空虚な人道主義による北朝鮮批判を続けているが、むしろ我が国はこの度の朝鮮危機を奇貨として、自主独立の気概を振起し、普遍的「人道」を弄ぶアメリカの干渉を排して、核廃絶という絵空事ではなく、自も核武装して核の均衡と相互抑止による現実的な平和構築への一歩を踏み出す秋ではないか。

(折本龍則)

本号目次

- 二面 日本精神を失わなかった
フィリピン人の志士
ピオ・デュラン（坪内隆彦）
- 六面 アジア主義に生きた
杉山家の伝承③（杉山満丸）
- 九面 玄洋社の源泉、加藤司書
（浦辺登）
- 十一面 近世東洋史（小野耕資）
十七面 『アジアの夜明け』①
（原作・草開省三／要約・原嘉陽）
- 二十一面 橘孝三郎の
大亜細亜文明論（坪内隆彦）
- 二十三面 書評・古谷経衡
『アメリカに喧嘩を売る国
フィリピン大統領
ロドリゴ・ドゥテルテの
政治手腕』（小野耕資）
- 二十四面 史料・日清貿易研究所
開所式における
荒尾精所長訓示
- 二十五面 連載 大亜細亜医学の中の
日本③（坪内隆彦）

日本精神を失わなかった フィリピン人の志士ピオ・デュラン

坪内隆彦

「志士を作るものは志士である」

フィリピンの志士ピオ・デュラン博士の人生は、日本精神への傾倒と東洋への回帰で彩られている。

昭和十七（一九四二）年一月にわが国がフィリピンを占領した時、日比の大亜細亜主義者は、日本精神への傾倒と東洋への回帰によって、すでに固く結ばれていたのである。

第一四軍宣伝班に加わった望月重信大尉は、日本精神をフィリピン人に叩き込もうとした。東京帝国大学大学院支那哲学科を卒業した異色の軍人・望月は、皇道主義者・渡辺薫美に学び日本精神の真髄を体現することを志していた。昭和十七（一九四二）年末、フィリピンを支える国士を作りたいと決意し、マニラ南方のタール湖周辺の保養地タガイタイ高原に、皇道主義教育の拠点「タガイタイ教育隊」を設立した。

念の為言え、望月が望んだのは、日本精神の押しつけではない。日本精神の真髄を他民族に自ら示し、民族覚醒を触発することだった。だからこそ、日本精神に悖る日本軍人の行動を、望月は容赦なく批判した。報道部発行の陣中新聞『南十字星』に寄せた「聖戦一年を顧みて」（一九四二年十二月）で、

些細なことでビンタを食らわした日本兵や、日本軍政の威を借りて暴利を貪る日本人を痛烈に批判、さらに「大マニラ市の紅灯のもと、夜毎に美酒に酔い痴れ、売色女の媚に現を抜かしているのは、一体何処の国民であろうか？」と痛烈に軍上層部を批判している。望月はまた、次のように書いていた。



望月大尉

「新比島が真に生命ある国家として成長する為に死する志士が必要である。

世に志士とは即ち死士の意である。今日比島に必要なものは斯くの如き死士の出現である。

今日幾人の志士がこの比島にをるか。上は大官要人より下は一吏一市民に至るまで多くはアメリカの鼻息をうかがいつつ大東亜戦争の流れに便乗せんとする阿鼻追従者である。と言うも過言でない。物質の窮乏は日一日と切迫を告げる。人心の腐敗に至つて遂にその言うべきを知らないような惨状である。（中略）『フィリピン』建設の鍵は実に比島に幾多の志士を作ることである。

然らば何物が志士を作ることが出来るであ

ろうか。日本学を講義しても、東洋精神に帰れといくら絶叫しても志士を作ることとは出来ない。志士を作るものは実に志士である。志士のみが志士を作り得るのである。即ち問題は在比日本人が真の志士となる事が出来るかどうかということが比島を建設し得るかどうかの根本問題となるのである。即ち日本人が比島建設の為に死に得るかどうかという事が中心問題である（望月大尉祖述、太平塾生・法子いせ謹記「死士道 国生み」）

自ら志士たるざるして、相手に何も伝えることはできない。望月の覚悟が窺われる。フィリピン人の愛国心の醸成と、フィリピンの東洋回帰を目指した望月が、東洋的訓練を実践躬行するため作成したテキストが『国柱』である。その序文で彼は次のように書いている。

「東洋精神に復帰する為には東洋的生活訓練が必要である

この書は新比島建設の指導者となるべく選ばれたる六十三名の青年学徒が「タガイタイ」の高原に於て燃えるやうな愛国の情熱を以て新比島建設の柱となるべく練成精進した生活の指標である。朝には太陽に先んじて闇を蹴破り斎戒沐浴して神意を仰ぎ、日出ては勉学精励して新時代の学を究め、日傾けば労働三昧仰ぎて天の高きを知り、伏して地の大を知る。日没すれば深夜法燈のもとに沈思黙坐し、久遠の時の流を凝視し、揺がざるこの国の礎を打ち建てんとして精魂を傾けたの

である。斯して掘り抜きたる民族精神の泉は比島の地下数百尺より噴出し、この国の万のものみな今や新生命に息吹を吹き返しつつあるのである。

東洋精神への復帰は比島の大地を深く掘り下げる事によつてのみ可能である。

東洋精神への復帰、これ新比島建設の大前提である。この心こゝに確立せらるゝならば新生比島の興隆は火の乾きたるにつき水の低きにつくが如く極めて容易である。

その将来は希望と幸福と栄光に満ち満たされてゐる。

希くば新生比島の百年学徒よ新時代の流に竿さす為には新しき時代精神と新しき科学とが必要である。

『新しき酒は新しい革袋に盛らるゝべし』とは今日の事である。』

デュランの東洋回帰論

望月が掲げた方針は、まさにデュランの思想と共鳴していた。望月の思想は、わが国の在野の興亜論者が発展させてきたものである。わが国興亜陣営は、植民地解放を目指すアジア各地の志士との関係を強めていた。フィリピン人としては、一九一五年に日本に亡命したアルテミオ・リカルテ、一九三四年に日本に逃れたベニグノ・ラモスらが代表的な志士である。

デュランは、一九〇〇年五月にアルバイ州(Albay)ギオボタンに生まれ、一九二四年に

国立フィリピン大学卒業後、数年間同大学法学部の教授として後進を指導した。その後、友人のマルセル・リムと共同で法律事務所を開設、日本との関係を深めていく。横浜正金銀行、日本鉱業など、日本人関係の顧問弁護士を務めたのがきっかけである。

一九〇九年にわずか十六歳で單身マニラに渡り、日比間の経済交流に尽力した金ヶ江清太郎は、次のように振り返る。

「アメリカの統治下にあつた当時のヒリッピンで、堂々と日比同盟論を主張する氏の勇氣と信念には、わたしも感服したものだつた。

デュラン氏が学者としての立場から、あらゆる関係の文書を渉獵し、研究を重ねてゆくうちに日本の歴史と国体を知り、そして日本民族に心を惹かれ、ことに氏の魂を強くうったものが、日本古来の武士道の精神であつたらしい。

ヒリッピンのように言葉も習慣も、そして文化も宗教も異なる群小の多民族が雜居している国で、国家としての歴史もまた、民族としての伝統もなく、まして植民地として永く外国の圧制下に苦しんできた国柄であつてみれば、連綿たる歴史と伝統と文化を待った国家と国民に対して、深い憧憬を抱き、ことに明治維新後、近代国家として発展してきた隣邦・日本に、心から尊敬の念を寄せていたとしても、不思議なことではあるまい。しかも主君に仕えた武士たちの、烈々たる自己犠牲の忠誠心と、義を第一とする五常の道は、お

そらくデュラン氏には驚異であつたに違いない。

ともあれデュラン氏の日比同盟論は、ヒリッピン人のなかにも多くの共感を呼び、ようやくナシオナリズムに目覚めてきた人たちには、人氣があつたものである。』(『歩いて来た道―ヒリッピン物語』)

デュランは、一九三五年には、『Time for a back-to-the-Orient movement in the Philippines』を刊行していた。彼の論文は大亜細亞協會発行の『大亜細亞主義』にも掲載されていた。一九三五年五月号掲載の「大亜細亞運動と比律賓」、一九三六年八月号池債の「大亜細亞主義運動と比律賓」などである。



ピオ・デュラン

デュランは『中立の笑劇・フィリッピンと東亜』(堀真琴訳編、白揚社、一九四二年)では、次のように書いている。やや長くなるが、今日の日本人に対する鋭い批判ともなっているので、途中省略せず引く。

「多数の自国民を覚ましめ行動にまで奮ひ立たせた最大の理想家にして愛国者たる著名にして、尊敬すべき支那人政治家(孫文、引用者)の口より出でたるこの助言は、貪欲にして残忍な恐るべき西洋物質主義に反対し、「王道」なる語に現されたる東洋の徳と正義の哲学への訴へを現してゐる。これは自分達が東洋人の血と肉とを所有してゐることを忘れ、種族的誇りを捨て、自己及び祖先の特性を有せず、又西洋人が與ふる一時的にして、皮相な物質的利益の為及び没利害的なりといふ偽善的申込と交換に、東洋を西洋化せんことを提唱し、又白人は有色人種を輕蔑の念を以て扱ふことをよく知つて居りながら、東洋の同胞よりも白人を好むが如き東洋人に対しよき反省の材料を提供するものである。幾世紀かに亘る西洋諸国の圧迫の結果、東洋の弱者をして最も激しい西洋主義者以上に、西洋化されんことを願ふ種族的裏切者と變へて了つた。かかる人々は白人が東洋文明の全機構を毀損し破壊せんとするの手段媒介となる。彼等は高い精神主義の東洋文明には相応しくないものであるが、かかる人々は白人の保護国に於ても蔑まれる。彼等は東洋に於ける白人が内蔵せる商業上に於て擴大強化せんとするの邪惡なる計画、表面上現す追従的尊敬の上に於てのみ繁榮するのだ。彼等は東洋に於ける西洋物質主義に結びついた金の光沢に目眩めき、西洋が支配する以前に於ける巨大な東洋の諸帝国の基礎となつた、東洋

戦後も貫かれたデュランの日本精神

人の不屈の精神たる自己放棄の精神を失つてゐる。寧ろ彼等は西洋諸国の支持が無くなれば、その国は経済的、社会的、文化的に没落するものなりと恥もなく予言するのだ。彼等はその種族的誇りは西洋化された東洋人として名を揚げんとの思ひで窒息させられてゐるので、自国民及び自種族に対し、積重ねられた毎日の侮辱には気がつかない。このやうな孫逸仙の意味深き言葉は、前記の不幸なる東洋主義の裏切者を種族的に本来の地へ還らしめんが為に発せられた言葉であることは疑ひ無い所である。

この種族的裏切者は、比律賓に於けるが如く、夥しく多数存在する所は無いであらう。比律賓人は西洋人の眼を以て自国を眺め、誇らかに西洋の文化文明を吸収した唯一の東洋国家として自らを区別する。

さらにデュランは、へ今や比律賓は、幾世紀かの絶えざる闘争の後、喪はれたる自由を再び獲得せんとし居れるを以て「東洋に還れ」の運動を発足するは、すべての比律賓人の義務である。幾世紀かの如何とも為し難い服従の間に強制的に押附けられた、厚く塗られた西洋文明の上塗りには、これを引剥いで、現在及び将来永遠に東洋諸国住民の生命の中に根本的影響を残す古き東洋文化の栄光を明るみに出さればならぬ」と訴えている。まさに、このデュランの言葉は、望月の精神ときれいに呼応していたのである。

フィリピン青年の指導に挺身した望月は、一九四四年五月二十二日、フィリピンで戦死した。その半年後、マニラのメトロポリタン劇場において、フィリピン青年一千有余名が敢然と蹴起し、「国柱会」を組織した。これを主導したのが、デュランであった。そして彼は、日本軍占領中には内務次官、対日協理理事長などを務めていたのである。

このため、戦後は対日協力者として苦難の時期を過ごさねばならなかった。ホセ・ラウレル、ホルヘ・B・ヴァルガスらの要人とともに、約十四ヶ月の間、投獄されている。

しかし、一九四七年にマニエル・ロハス初代大統領によって釈放されると、デュランは再び政治を志した。一九四九年には、郷里アルバイ地区から下院議員選挙に出馬し当選、ナシヨナリスタ党の有力な幹部となり、銀行通貨委員会委員長、外務委員会委員長として華やかな議会活動を展開した。特筆すべきは、彼が日本精神を戦後も捨てなかったことである。金ヶ江は、振り返る。

「戦後間もなく二番目の新夫人を同伴、来日したことがある。その時は、まだヒリッピン大使館がなくて、ヒリッピン代表部の代表だったメレンシヨ氏の公邸で会ったことがある。デュラン氏はわたしの顔を見るなり、驚いた声でこう叫んだものだ。

「ミスター金ヶ江、武士道の国ニッポンは、いったいどこへ消えてしまったのかね?!」

君主国日本に憧れていたデュラン氏の脳裡にあった、忠君愛国のイメージは、敗戦の虚脱のなかで混乱している日本の姿に接してはかなくも、音をたてて崩れ去ったものらしかった。その驚きと失望のうちに語るデュラン氏の述懐は、次のようなものであった。

同氏は、かねてから新夫人に向かって、日本ほど素晴らしい国はない、と口をきわめて礼讃し、わがことのように自慢していたという。

「日本の善良な国民は、天皇陛下をうやまうこと神のごとく、たとえば乗っている電車が、天皇のおいでのなる皇居の前を通る時は、乗客はみんな起立して、皇居に向かってさい敬礼するし、また日曜日には、ヒリッピン人が教会へお詣りするように、市民たちは朝早くから皇居前の二重橋という所へ行き、そこに跪ずいて両陛下を遥拝し、老いも若きも忠誠を誓うのだよ。こんな国民は世界広しといえども、この日本よりほかにはないんだ。なんと素晴らしい国民じゃないか」

ちようどその日が日曜日だったので、デュラン氏は夫人を呼んで、「お前は、三宅坂の教会に行つて、ミサのお詣りをしてくるがいい。わたしは、これから二重橋へ行つて、両陛下を遥拝してくるから」

そう言つて一緒に宿舍を出たデュラン氏が、二重橋まで来てみると、脆ずいて遥拝している敬虔な日本人の姿は一人もなく、そのあたりを若い男女が手をつないで、楽しそう

に散歩している意外な光景が限に映り、まるで、マニラのルネタ公園にでも立っているやうな思いがしたデュラン氏は、思わず眉をひそめて、「ここが日本の二重橋か……」と、思わず口走しまったというのである。(中略)

デュラン氏は、名状しがたい気持で宿舍に戻り、このことを夫人に話したくだりを語りながら、「ミスター金ヶ江、妻に対して、こんなに面目を失墜したことはなかったよ。僕の話聞きながら笑っている妻の顔を、面目ないというのか、氣まりが悪いというのか、まともにには見られなかったよ」と、こぼしたことがあった。

同時に、デュランは戦後も愛国精神を堅持した。戦前小磯内閣の大蔵大臣を務め、戦後日本国主席全権大使としてフィリピンとの賠償交渉にあたつた津島壽一は、次のように書いている。

「デュランさんは親日家であつたが、その根本の思想はフィリピン民族主義者、フィリピン愛国家として教育、政治の部面に活動したのであり、そして、そのためには日本と親しくするのがいいという考えの持ち主であつた。従て国語についてもタガログ語を奨励した。デュランさんの議会におけるタガログ語の演説などは堂々たるものであつたそうだ。(私にタガログ服の着用を推奨したのも、こういつた主張のあらわれだと解釈すべきであろう) (『芳塘随想 第十集』芳塘刊行会、昭和三十八年)

百八人の日本人の命を救ったデュラン

ところで、一九四五年十月にマニラで日本のBC級戦争犯罪人に対する軍事裁判が始まっていた。一九四七年四月に最終判決が下され、百七十七名が有罪判決を受けた。山下奉文陸軍大將ら六十九名が死刑判決を受けた。終身刑の判決を受けた三十三名と有期刑の判決を受けた七十五名(合計百八名)は、モンテンルパ近郊のニュービリット刑務所に収容された。これに最も心を痛めていたのが、デュランである。彼はニュービリット刑務所を訪れ、収監されていた日本兵から手紙をゆだねられた。この手紙を持参し、一九五一年十二月二十四日、デュランは来日した。新井恵美子氏の『死刑囚の命を救った歌』には、デュランが、収監されている日本兵たちの留守家族と対面する様子が描かれている。

(一九五二年) 一月十日、デュランは留守家族と懇談し、モンテンルパの様子を語った。その時、死刑囚の鳩貝吉昌の次女・礼子ちゃん(十二歳)がデュランに語りかけた。

「おじさん、私が生まれてからまだ一度も会ったことのないお父さんが……」と話し始めて、声にならない。デュランは「お父さんに会えるよう努力しましょう」と礼子ちゃんに約束した。「皆さんの気持ちはきつとフィリピンに伝えます」と重ねて約束したのだ」

ちょうどその頃、後に「あゝモンテンルパの夜は更けて」をヒットさせる渡辺はま子は、巣鴨の拘留所の戦犯慰問活動を通じて親しくなった教誨師の関口慈先師の紹介で、デュランと対面していた。そして、はま子はニュービリット刑務所に収監されている日本兵のことを初めて知る。同年六月、はま子は楽譜と短い手紙が入った一通の封書を受け取る。楽譜の題名は「モンテンルパの歌」。作詞・

代田銀太郎、作曲・伊藤正康と書いてあった。代田も伊藤も、マニラ軍事裁判で死刑判決を受け、ニュービリット刑務所に収監されていた日本兵である。「モンテンルパの歌」は、刑務所に収監されていた日本人の、日本への望郷の念を込めた曲だった。「モンテンルパの歌」を発案したのは、処刑の瀬戸際に立たされていた日本兵の助命活動に挺身していた、真言宗の僧侶・加賀尾秀忍。はま子は早速歌をビクターレコードに持ち込み、『あゝモンテンルパの夜は更けて』が発売されることになる。

一九五二年十二月二十五日、はま子はニュービリット刑務所を訪れ、慰問のステージで『あゝモンテンルパの夜は更けて』を披露した。

(一)

モンテンルパの 夜は更けて
つる思いに やるせない
遠い故郷 しのびつつ

涙に曇る 月影に

優しい母の 夢を見る

(二)

燕はまたも 来たけれど

恋しわが子は いつ帰る

母のこころは ひとすじに

南の空へ 飛んで行く

さだめは悲し 呼子鳥

(三)

モンテンルパに 朝が来りや

昇るころの 太陽を

胸に抱いて 今日また

強く生きよう 倒れまい

やがて、日本兵たちも一緒に歌いだし、大合唱となった。慰問のステージの終わりに、デュランは、「君が代をお歌いなさい。私が責任を持ちます」と言い、一同は起立して祖国の方に向かって歌い始めたという。

『あゝモンテンルパの夜は更けて』大ヒットによる助命嘆願の署名、関係者による粘り強い努力の結果、ついに一九五三年七月、フィリピンのキノ大統領の恩赦により、収監されていた百八人全員が釈放された。キノ大統領は、夫人と子供三人を戦争末期に失ったが、「自分の子供や国民に、我々の友となり、我が国に永く恩恵をもたらすであろう日本人に対する憎悪の念を残さないために、これを行うのである」との声明を発出した。

デュランは、一九五七年七月に来日した際

に脳出血に罹り、荻窪の東京衛生病院で三カ月間療養した上でフィリピンに帰国した。しかし、その後も健康が勝れず、一九六一年二月二十八日、マニラ郊外の自宅で亡くなった。金ヶ江は次のように書き残している。

「日本へも来日したことのあるファニタ夫人は、デュラン氏の亡きあと、アルバイ州の選挙区の人たちに推されて、下院議員に連続当選しているそうだが、これを見ても、デュラン氏がいかにも人望があったか、想像されるのである。人間の真の価値というのは、その人の死後に決まるものだ、とよく言われるが、このデュラン氏などは、生前よりむしろ死後において、その価値が再認識された一人ではあるまいか」



『あゝモンテンルパの夜は更けて』に聴き入る日本人同胞

アジア主義に生きた杉山家の伝承③ 杉山満丸

杉山家に伝わる思想がどの時代から伝わったものか知る由もありませんが、私の父・杉山龍丸が書き遺した文章を読むと、私の祖父・夢野久作（作家・本名杉山泰道）から長男・龍丸へと伝えられた教えの一端をうかがい知ることができます。

以下は、福岡の月刊誌「フオーNET」に連載したものです。

杉山学（一）

龍丸（夢野久作の長男）が小学校に入った頃、よく人かは、大きくなったら何になりま

るか？」と、訊かれました。

ある時、同じように聞かれた龍丸が、即座に、

「うん、うちな、うちは、陸軍大將になるとい

たい」

と答えました。その様子をそばにいた父・夢野久作は笑って聞いていました。

それからしばらくたった時、父・久作が龍丸に次のような話を始めました。

「龍丸、明治維新後、多くの志士が、明治の元勳とやら、大將とやら、男爵とやら、華族になったりして、偉い奴のように思うとるが、あやつらはな、人を踏みつけにしたり、ずるいやつばかりなのだ。本当に明治の御一新（明

治維新のこと。明治二〇年頃までは御一新という言い方が一般的であった）のために働いた人々、純粋な人々は、皆死んで行ったのだ。いざというとき、あやつらは、皆逃げて行った奴だ。本当の人々は、皆笑って、堂々と死んで行ったのだ。お前は、それでも、陸軍大將になるのか？」

と、龍丸に問いかけました。



加藤司書の銅像

【右写真 福岡市中央区西公園にあった加藤司書の銅像。戦争中の供出で台座のみが現存する。銅像建立するための活動が始められている】



【右写真 太宰府天満宮に逃れた三条実美以下七卿（福岡に到着したのは五卿である）】

加藤司書の切腹事件（乙丑の獄）のとき、勤皇開国派の志士の人々が沢山捕まりました。

徳川幕府と、黒田藩の佐幕派【※尊王攘夷・討幕に反対し、幕府政策を是認・補佐した幕末党派】の人々は、尊王攘夷派の過激な人々を挑発して事件を起させ、そして、自分等の開国の責任上、最も将来障害となる、勤皇開国派の人を捕えて処断したのでした。

勤皇開国派の人々は、過激な行動や、暴力的行為が、日本の将来を開拓するとは思わず、もっと、国民生活、農業技術、経済や、国や社会の機構を改めてゆく、いわゆる経綸をもつて、努力していた人々でしたが、故に、捕えられても逃げかくれせず、また抵抗もしませんでした。

また、何時死が到来しても、日頃からなすべきことをやっていましたし、覚悟も出来ていました。

梶子屋の牢に幽閉され、そして、斬罪に処せられた人々のことの言い伝えがあります。が、それらの人々は、牢獄の中でも、日常の生活と変ることなく、斬罪の場に出されても、仲間の人々と談笑していたということでした。

尊王攘夷派の人々は、自ら挑発に乗って、爆発しましたが、逃亡した人が多かったようです。

夢野久作は、これを非常に憎み、そして、このように従容として死についた人に限りな

い尊敬の念を抱いていたようでした。

それは、彼の祖父・三郎平灌園から詳細を聞き、囃んで含めるように教えられていたからでしょう。

※乙丑の獄、一八六五年（乙年）に、福岡藩で起こった佐幕派による勤皇派弾圧事件。乙丑の変と呼ぶ場合もあります。

一八六四年に家老加藤司書・藩士月形洗蔵・中村円太・平野国臣らを中心とする筑前勤皇党は藩政を掌握しました。そして、八月十八日の政変によつて京を落ち、長州藩から太宰府天満宮に逃れた三条実美以下七卿（福岡に到着したのは五卿である）と供として付いていた土方久元ら元土佐勤皇党の人々の面倒を見ることになりました。彼らは、長州討伐の前に長州藩を説得し、西郷隆盛や坂本龍馬の間に立ち、薩長同盟の世話をするなど一時は幕末の主役となつて活動していました。月形は西郷・坂本・桂小五郎といった大物と親しく「月形半平太」の名前で呼ばれるほどの人物でした。また加藤は薩長同盟の際、両藩の仲立ちを頼まれるなど大いに活躍し、筑前勤皇党の名を全国に知らしめました。

加藤はロシアのプチャーチンが長崎に来た時に鉄砲隊五百名を率いて長崎警固に向かつており、その際に夢野久作の曾祖父・啓之進も同行したと伝えられています。福岡藩に帰ってきたあと、福岡城は港に近く外国艦船の砲撃にさらされると感じた加藤は犬鳴峠に

犬鳴御殿の建設を始めます。その、犬鳴御殿建設があだとなり、一八六五年、藩士ならびに関係者百四十名以上が逮捕され、加藤・建部以下七名が切腹、月形・中村以下十四名が榊木屋（福岡市中央区地行浜）で斬首（うち一名は脱獄するものの力尽き、那珂川から箱崎松原（同市東区箱崎松原）に漂着した遺体を斬られた）、野村望東尼以下十五名が流罪という大弾圧が繰り広げられました。

今でも、加藤司書が生きていれば、坂本龍馬は現れなかったと歴史に興味がある福岡人は思っています。

なお、五卿のうち、東久世通禧が筑前勤皇党の福岡藩士林元武、早川勇あてに贈った書が2つあります。林あてのものは下関市長府博物館にあり、早川あてのものは不明（遺族が所持か）です。

杉山家も、当主・啓之進（夢野久作の曾祖父）が隠居、長男は廃嫡となり、そのため、長女と結婚していた久作の祖父・三郎平灌園が青木家の長男でありながら杉山家の跡を継ぎ杉山家はなんとか継続することができました。杉山三郎平は、藩校修猷館の水戸学の助教で、その後、藩の外務大臣にあたる諸藩応接役として活躍しています。また、調べていくと、長州の吉田松陰も薩摩の西郷隆盛も水戸学の影響を受けているのです。

余談ですが、水戸学成立には北部九州の人物が大きく関わっています。水戸学成立に大きな影響を及ぼした朱舜水は、明国滅亡時

に長崎に逃れてきた儒学者で、その舜水を支え続けたのが、柳河藩の儒学者であった安東省菴です。省庵は、少ない俸禄から、六年間に渡りその半分を長崎にいた朱舜水に送り続けます。後に、朱舜水は水戸光圀に見出されて江戸に旅立ち、その際に、柳川に立ち寄り、省庵に自分の全財産である三体の孔子像を託したと伝えられ、それは今でも実在しています。さらに、安藤省庵を重用した柳川藩の藩主は苦勞人・立花宗茂で、その実父は、岩屋城の戦いで有名な高橋紹運です。

私は、「高橋浄運なくして立花宗茂なく、立花宗茂なくして安東省菴なく、安東省菴なくして朱舜水なく、朱舜水なくして水戸学なく、水戸学なくして、吉田松陰も西郷隆盛もなく、そして、明治の御一新（明治維新）もない」と思っています。

2. 杉山学（一）

徳川幕府と、黒田藩の佐幕派【※尊王攘夷・討幕に反対し、幕府政策を是認・補佐した幕末党派】の人々は、尊王攘夷派の過激な人々を挑発して事件を起させ、そして、自分等の開国の責任上、最も将来障害となる、勤皇開国派の人を捕えて処断したのでした。

勤皇開国派の人々は、過激な行動や、暴力的行為が、日本の将来を開拓するとは思わず、もっと、国民生活、農業技術、経済や、国や社会の機構を改めてゆく、いわゆる経緯をもつて、努力していた人々でしたが故に、捕

えられても逃げかくれせず、また抵抗もしませんでした。

また、何時死が到来しても、日頃からなすべきことをやっていたし、覚悟も出来ていました。

榊子屋の牢に幽閉され、そして、斬罪に処せられた人々のことの言い伝えがあります。が、それらの人々は、牢獄の中でも、日常生活と変ることなく、斬罪の出されても、仲間の人々と談笑していたということでした。

尊王攘夷派の人々は、自ら挑発に乗って、爆発しましたが、逃亡した人が多かったようです。

夢野久作は、これを非常に憎み、そして、このように従容として死についた人に限りない尊敬の念を抱いていたようでした。

それは、彼の祖父・三郎平灌園から詳細を聞き、囁んで含めるように教えられていたからでしょう。

杉山家は、代々、国学や、儒学の伝承があったようです。

それは、黒田公のお傍で、常に学問や武芸、或は武士のたしなみとしての能楽その他のことをお相手していたことにも原因があったようでした。

特に、能楽等は、能役者というものは、日本の階級制度では、一般庶民より下に見られていた時代でしたので、直接諸公の身体に触れて指導することや、言葉をかけることは出

来ないことになっていました。

それで、お手直し役とかいう、側近のものがあつて、それには、士分で諸芸に堪能なものがあつていった訳です。

杉山家は、いろいろな役職にありましたが、本来この方の家柄と申すことが出来たでしょう。

杉山家には、これらの古書が多くありました。

そして、親から子への伝承がありました。特に祖父の杉山三郎平灌園が、修猷館の助教として、水戸学派の専門家であつたという経歴がありますが、父・杉山龍丸が夢野久作から教えられたものは、水戸学派の朱子学とは異なるものでした。



杉山三郎平灌園

その一例が、明治維新の「維新」という言葉でありました。

中国の『詩経』という書物は、孔子が、儒教を創始するとき、中国の伝統の宗教的な経典として、最も重要なものとした、四書五経の中の一つであります【※儒教の教典の総称。『大學』『中庸』『論語』『孟子』を四書、『詩経』『書経』『禮記』『易経』『春秋』を五経と呼ぶ。その『詩経』の中の大雅篇の中の文王の章

に、「維新」という言葉があります【※「文王在上、於昭于天、周雖舊邦、其命維新」(『詩經』大雅・文王之什にある詩篇「文王」より)】。この中国の文王は、周王朝の創始者でありますが、文王は、元來殷の国の地方の諸侯の身分でありました。

殷の国の王であつた紂という人は、大変な暴君でしたので、諸侯は、紂を討つべしと、文王に迫りましたが、文王は、黙って自分の国に帰って、只国内の政治に努力したのでした。

文王の子、武王は、遂に起つて紂を討ちまして、周王朝の時代になりました。

これを、『易経』では、革命と申しています。【※「天地革而四時成、湯武革命、順乎而應乎人」(易経「革卦」)】

革は、生皮をなめして、強韌にすることの意で、天命が、新しく強韌になるといふことです。

維新は、その意味を有して、文王の謹み深く、ひたすら、道を努めた姿より具現するものを示していると申します。

しかし、歴史的に見て、臣下のものが、主君にかわつて、天下・国を治めることになつた訳で、夢野久作は、その維新という言葉で、日本の明治の変革にあてはめるのは、歴史的事実を歪めるものである。それは、何処までも、御一新でなければならなかつたのだと、父に申していたそうです。

それは、夢野久作の考えだけではなく、啓

之進、三郎平灌園、茂丸、そして、夢野久作と一貫して、伝承して来たものと思われま

す。明治維新と前後して、この政体の変革に際して、多くの歴史的に明らかにされていない暗闘があつたようです。

勤皇開国派の人々は、徳川幕府や、佐幕派の各藩の人々からも、特に明治になつては、尊王攘夷派であつた人々からも狙われて、多くの暗殺や、権力による圧迫や迫害の対象になつたようです。

それは、天皇を中心とする、欧州の帝国主義貴族制度を導入して、幕府の官制や、財政組織を新政府に組入れることを行つたことにより、いつそう甚だしくなつたように思われる点があります。

夢野久作は、祖先からの伝承もあつたでしょうが、本当に真面目な人々、日本の将来のために努力している人々を、権力や組織機構の力で迫害し法の名の下に暴虐な無法な行為があつたことを憎悪して、父に多くの例をあげて話していました。

明治前後から明治十年に亙る一連の事件は、その裏面にそのようなことがあつたとして、具体的に話をしていたこともありま

す。そんな時に良く例を引いていました天智天皇の古歌に

朝倉や、

木丸殿にわがをれば

名のりをしつゝ、

行くはたが子ぞ

と、いうのがあります。【※『新古今和歌集』

卷第十七、天智天皇御歌】

昔の天皇は、民百姓と共に生活をしていて、国民と共にあつたのだ。



天皇は、常に国民と共にあつて、国民のために働いて居られた。そのため

に、天皇の御殿は、丸太の木でつくられ、屋根は、自然の萱で葺かれて、軒は

切らずに、萱の葉先が自然に垂れたままであつた。非常に質素なものであつた。京都の御所も、決して棟の高いものでなかつた。しかし、明治になつて、徳川の城に入り、濠を深くし、国民との間を隔て天皇をとりまく連中は、外国のまねをして、昔の徳川の諸侯よりもつと俗悪な外国の貴族のまねをして墮落して行つた。



それは、日本の本来の姿、天皇の本質的なものを失うことになつたのだと憤つていました。

* 朝倉の宮 『日本書紀』によれば、斉明天皇六年(六六〇年)七月に百済が唐と新羅によって滅ぼされると、斉明天皇は難波などを経て斉明天皇七年(六六一年)三月二十五日に姉大津(現在の福岡市博多区)の磐瀬行宮に入り、五月九日に朝倉橘広庭宮に遷して、百済復興の戦に備えた。しかし、七月二十四日に朝倉宮で崩御。朝倉橘広庭宮に都が置かれたのはわずか二か月余りということになる。

玄洋社の源泉、加藤司書

浦辺登

玄洋社は、福岡藩家老であった加藤司書を源泉とし、西郷隆盛の精神を継承するといわれる。西郷隆盛については「敬天愛人」という言葉とともに、多くの人々の記憶にある。

しかし、加藤司書については、西郷と同時代において活躍しながらも、無名に近い。地元福岡ですら、平野國臣は知っていても加藤司書の知名度は低い。

そこで、今回、この加藤司書について述べてみたい。

東洋経綸の源流に連なる加藤司書

加藤司書という人物は、幕末維新史において抹消された存在といっても過言ではない。西郷隆盛とともに、第一次長州征伐における解兵において尽力したにも関わらず、史書には西郷の名前のみが残る。「八月十八日の政変」、いわゆる文久三（一八六三）年八月十八日のクーデターで京の都を追われた三條実美以下五卿を福岡藩で引き受けた立役者でもある。筑前勤皇党の首領でありながら、配下の月形洗蔵や早川勇の名前は知られるが、なぜか、加藤司書の存在は記憶に残らない。

しかし、加藤司書という人物を俯瞰した時、東洋経綸（東洋の安定、興隆）において、西郷隆盛、横井小楠（熊本藩）と同列に、その

源流にすることが見て取れる。それは、時代を広く、大きく見た時に初めてわかる。中国革命、いわゆる孫文の辛亥革命にまで広げて眺めてみるとよく理解できる。

孫文、黄興など中国の革命党のメンバーは日本の明治維新を高く評価していた。孫文の蔭になって存在感が薄い、黄興は鹿児島まで赴き、西郷の生き方、精神に心服したひとりだった。

その西郷に傾倒した代表的な人々の名前を列挙すると、荒尾精（陸軍参謀本部、漢口桑善堂、日清貿易研究所）、平岡浩太郎（東洋学館、玄洋社）、佐々友房（済々黌）、菊池九郎（東興義塾）がいる。荒尾精は西郷の書生であり、平岡浩太郎は西郷を誰何したことから関係を密にし、薩軍に身を投じた。佐々友房は熊本隊を率いて薩軍に合流し、西南戦争後、熊本に済々黌を興し人材の育成に務めた。菊池九郎も西郷の書生として心酔し、故郷の青森県弘前市で東興義塾を開き後進の育成に務めた。玄洋社の源泉である加藤司書、西郷や横井という人々が横一列に連なることで中国革命は推進された。

その相関図を眺めた時、アジア主義を標榜する玄洋社が、なぜ、加藤司書を源泉に据えた背景がくつきりと浮かび上がる。

大正四年の奇跡

加藤司書の菩提寺は節信院（せうしんいん）といって、福岡市博多区御供所町にある。現在も加藤家の子

孫が寺を維持しているが、大正四（一九一五）年九月、この節信院で信じがたいことが起きた。老朽化した寺の改築にあたり、加藤家の墓所を改葬している時だった。一基ずつ、墓石を移動させ、骨の一片でも粗末にできないと墓が丁寧に掘り返された。

長い年月を経た加藤司書の墓には遺骸を納めた甕があり、それが人夫によって慎重に地上へと引き上げられた。すると、甕の底に何かが見える。司書公の直孫であり節信院住職加藤輔道師が甕に手を差し入れ、触れるものを取り出した。それは司書公が切腹を命じられた際に身につけていた白羽二重の袴（絹裏地の和服）と下着だった。骨のひとつ、毛髪の一筋も見当たらない中、糸のほつれも、破れも無く、当時のままで現出したのだった。西洋の科学によって世の不思議が解明される時代に、説明のしようのない現実が表出したのだった。五十年の歳月を経た奇跡は瞬く間に近隣、遠方へと伝わり、一目、袷を見ようと人々は節信院に押し掛けた。

嘉永六年の活躍

加藤司書公は文政十三年（一八三〇）三月五日、福岡大名町堀端（現在の福岡市中央区）に生まれた。加藤家は古くから福岡藩の重臣だったが、司書公自身もわずか十一歳で藩の中老に加えられた。その司書公が加藤家当主となった頃、日本を取り巻く環境は西洋列強に脅かされていた。長崎で交易を行なってい

た清国商人がアヘン戦争を報じてきた。イギリスが強力な武力を背景に、アヘン取引を拒む清国を侵略したのだった。日本近海にも異国船が押し寄せ、西洋で唯一の交易国であるオランダまでもが開国を進言してくるほどだった。

そして、嘉永六年（一八五三）六月、ペリー率いるアメリカ艦隊が江戸湾（現在の東京湾）に来航した。日本側の懸命の対応でペリーは立ち去ったものの、この一件から海防と近代的な軍備の充実が求められた。「異国船を打ち払うべき」「開国すべき」など、喧々譁々の論争が日本中に渦巻いた。そのペリー来航騒動の直後、ロシアのプチャーチンが長崎に来航した。日本との交易、つまり、開国を求めてだった。この時、弱冠二十三歳の司書公は藩兵五百を率いて長崎港警備に急行した。長崎港は幕府の命により、佐賀藩と福岡藩が交代で警備する港だった。

ロシア艦隊は表向き薪水を求めての来航だった。幕命では、異国船に薪水も水も与えてはならなかったが、司書公は武士の情けとして給水だけは約束した。プチャーチンは給水に謝意を表しながらも、本来の目的である開国（交易）を要求してきた。司書公は、幕府の許可を得るには江戸との往復で十日や二十日はかかる。よって、要求には応じられないとして即座の退去を求めた。この司書公の一步も退かぬ対応に、ロシア艦隊は出港していった。不思議なことに、このロシア艦隊と

の対応は幕府の川路聖謨の名前のみ、史書に記載される。

福岡に帰藩した司書公は藩主黒田長湊^{ながはな}に一切の報告をしたが、恩賞として陣羽織と刀が与えられた。これは、長い福岡藩の歴史においても破格の対応だった。福岡藩は藩祖黒田官兵衛（如水）、初代藩主黒田長政と血脉が藩主の座を占めたが、七代目以降は他藩からの養嗣子を迎えていた。第十一代藩主である黒田長湊^{ながはな}も島津家から迎えた藩主だった。ゆえに、旧例を構わず、藩祖の頃から仕える加藤家の司書公を篤く遇したのだった。しかしながら、これは、他の家臣からの妬みになった。

元治元年の大功績と処断

安政元年（一八五四）、幕府は日米和親条約を締結した。ペリーによる強圧外交に屈した結果だった。この安政条約締結からの日本は激動の時を迎え、万延元年（一八六〇）三月に大老井伊直弼が水戸藩、薩摩藩の浪士に暗殺された。

文久三（一八六三）年八月に天誅組の決起、三條実美らの「八月十八日の政変」、十月に「生野の変」、元治元（一八六四）年三月には天狗党の決起、そして、七月に「禁門の変」と続き、八月には第一次長州征伐の議が起きる。禁門の変で長州藩は朝敵の烙印を押された。ここで幕府は諸藩に長州征伐（第一次）の命令を下した。福岡藩も討伐軍として長州

に向かったが、事前に情報収集していた司書公は五百の藩兵を率いて福岡を出立していた。

司書公は征長軍総督徳川慶勝が陣を構える広島に向かった。今は、国内騒乱の時ではなく、一丸となつて外敵に立ち向かわなければならぬ。真の勤皇であれば、長州藩を討つのではなく、征長軍を解散させなければならぬと徳川慶勝に説いた。

すでに三十六藩の軍が集合していたが、司書公は征長軍参謀の西郷隆盛と図り解兵に成功した。数を持んでの幕軍だったが、実際は厭戦気分であることを司書公は見抜いていた。とどめは、西郷が一万余りの薩兵を引き上げると宣言したことだった。この長州征伐解兵において司書公の名は史書に見ることはなく、西郷一人の策略と記される。

しかし、司書公はこの征長解兵が成功した喜びの歌を残した。それが今に伝わる『皇御国』であり、戦前は准国歌として称えられた。

すめら御国の武士^{もののふ}はいかなる事をか勤むべき、只身にもてる赤心^{まごころ}を君と親とに尽くすまで

征長解兵における軍議で、長州に滞在する三條実美は遺憾ながら「浮浪之者共」として扱われた。朝廷から官位を取り上げられれば、ただの浪人風情に過ぎない。が、しかし、

これは福岡藩領太宰府の延寿王院に五卿を完全に転座させる建前だった。五卿を迎えることは、常に幕吏の監視を受ける。これは、幕府との対立を避けたい福岡藩佐幕派の悩みの種であったことから、加藤司書率いる筑前勤皇党と軋轢を生じた。

筑前勤皇党と福岡藩佐幕派との軋轢

この福岡藩佐幕派は急激な変化への対応に遅れ、司書公を頭領とする筑前勤皇党との確執を生んだ。本来、勤皇でありながらも体制側に身をおかなければならない藩役人も多く、

疑心暗鬼から藩内で対立が生じた。藩主黒田長湊は苦渋の選択として筑前勤皇党の処断を決めた。ここに、司書公は藩政を乱したとする責を負い、切腹を命じられた。これが福岡藩史に残る「乙丑の獄^{いつちうのく}」という政変である。

司書公の行動は一藩の事情よりも、皇国全体の行く末を考えてのことだった。その尊皇精神の奇跡が半世紀後に墓から出現した羽二重の袷だった。

高杉晋作との会談

封建的身分制度の厳しい時代ではあったが、司書公の上下を問題にしない態度は長州の高杉晋作に対しても同じだった。元治元年^{げんじ}（一八六四）十月末、筑前勤皇党の中村圓太に導かれた高杉が密かに筑前福岡藩入りを果たした。追い詰められる長州藩、身の安全が

保障されない三條実美公ら七卿の保護を求めたの事だった。

野村望東尼^{のむらたけとうに}の平尾山荘は現在、福岡市中央区に復元されている。周辺は住宅が建ちこみ、往年の面影を偲ぶこともできない。しかし、公園として整備され、復元された山荘を訪ねると、ここで数多の志士が皇国の行く末を熱く語ったのかと思うと背筋がピンと伸びる感がある。

長州藩の代表とはいえ、福岡藩家老の前では身の置き所に苦慮した高杉と推察する。しかし、身分差を超え、司書公は皇国の志士として高杉と意見を交わした。中村圓太、月形洗蔵、鷹取養巴、早川勇、筑紫衛などが控えるなかで会談は行われた。高杉は司書公の強力な後ろ盾を得て、再度、長州へと帰藩し、藩政の主導権を得ることができた。司書公にとって、すべては、三條実美公らの身の安全が優先だった。

歴史に「もし」は禁物だが、この時、高杉が司書公との会談に成功しなければ、維新の大業はどうなっていたかわからない。史書において、この重要な場面が抜け落ちているのを淋しく感じる。

太宰府天満宮に遺された幕末史

太宰府天満宮（福岡県太宰府市）は、学問の神様として全国に知られる。この太宰府天満宮の参道右手に「松屋」という茶店があり、店の一角に「旧薩摩藩定宿」と記された木製

看板がある。手跡は清水寺（京都）の貫主である。菅原道真公を祀る太宰府天満宮に、なぜ、と誰もがいぶかしがる。さらには、その左手頭上には「維新の庵」と金文字で彫りこまれた大きな木製看板が掲げられている。圧巻である。



「維新の庵」額
(太宰府天満宮参道 松屋)

店に入ると、西郷隆盛、大久保利通、平野國臣、勤皇僧月照の書簡レプリカが壁にかかっている。どうして、幕末史に登場する人々の名前がと不思議に思う方は多い。この松屋は旧薩摩藩の定宿であるとともに、薩摩に落ちていく前の月照が匿われた場所だった。

緩い上り坂の石畳の参道を進むと、目前に壮麗な門構えが見える。神仏混交時代の名残である宿坊の延寿王院である。今では、太宰府天満宮宮司の自宅として利用されて

いるが、ここに三條実美以下五卿が慶應元年（一八六五）年一月から約三年、滞在した場所だった。京の都を追われ、長州に西下した公卿たちだったが、さらに、その安全を確保するために加藤司書が手配した先でもある。



延寿王院

この延寿王院の右手に、案内看板がある。多くの観光客は、この看板にまったく気づかず、素通りしてしまう。しかし、その看板には西郷隆盛、高杉晋作、坂本龍馬までもが訪ね来たと記されている。そして、維新の策源地でもあったと。つまり、筑前勤皇党が薩長和解に持ち込んだ結果が薩長同盟である。現代、フィクションとノン・フィクションとが混同して、理解されていないのは嘆かわしい。



三條実美卿らが転座した太宰府天満宮 延寿王院

明治維新の大きな目標、目的は、押し寄せる欧米勢力に対峙し、排除することにあつた。さらに、東洋経緯（東洋の安定、興隆）と続く。このためには、徳川家という私ごとに固執し、日本という公の皇国を護ることを考慮しない幕府を倒さなければならぬ。その倒幕の策源地として三條実美ら五卿を太宰府に迎えたのが、加藤司書と筑前勤皇党だった。

東洋経緯という大きな枠組みで俯瞰したとき、福岡藩の加藤司書の存在は無視できない。源流として西郷隆盛とともに、歴史書に大きく記されるべき存在である。ゆえに、アジア主義者として行動した玄洋社は精神を西郷隆盛に求め、源泉として加藤司書を仰いだのだった。加藤司書なくして、維新史は語れず、東洋経緯も語れないことを覚えておいていただきたい。

近世東洋史

小野耕資

「東洋史」の成立

文明開化によって近代科学を受け入れた明治日本において、「歴史」と言えば欧州の歴史を指す時代があつた。それが那珂通世や内藤湖南、桑原隲蔵らによって東洋史が編まれることになった。「東洋」という領域概念は日本で生まれたということもできるのである。

世界史は元朝から始まるともいわれる。それまでは各国が独自に歩みが続けていたものが、元朝の征服によって一つの歴史を歩むようになったからだ。同じように、東洋の各国が良くも悪くも互いに似たような運命にさらされるのも、元朝から始まる。本稿では、わたしの力不足により東洋各国を網羅できていないが、支那地域を中心とした東洋の歴史を見ていきたい。

中華世界とはどこか

現在の中華人民共和国の領土は歴代の伝統的な王朝の版図とは異なる。ではなぜ現在のようになったのだろうか。伝統的支那の版図は大体北は万里の長城を境目としている。万里の長城は紀元前の秦（China）や支那の語源でもある）の始皇帝の時代に作られた。現在のように本格的に整備されたのは明朝のとき

である。もっともこの秦朝自体が西方を起源とする王朝であったため、一概にいうのは危険であるが、基本的に支那王朝は漢民族が主体となってきた。それが大きく変わったのがチンギスハーンから始まるモンゴル帝国、つまり中原を統一した後は元朝と呼ばれる時代である。

元朝の歴史に入る前に、中華思想について書かなくてはならない。中華思想では、中華王朝は天下、つまり世界の支配者であり、天子（皇帝）は全人類の代表とされた。中原は中心であり、周りは野蛮な地域である。野蛮な地域は中原の主（天子）に貢物を行うことで初めて「国」に昇格する。中原に国を構えるのこそ「中国」である。この「中国」は、

古代「中国」においては黄河流域のことであった。それが長い歴史の中で拡大して、だいたいい黄河と長江の間の地域を指すようになっていったのである。「中国」は儒教文化の中心ともされた。もっとも、儒書のなかにいわゆる中華思想的部分は多くない。むしろ支那国内の郊外を指して野蛮と言っていた節がある。そうした地域的、経済的区別が対外関係に徐々に変化していったのである。

元朝の成立と崩壊

西暦一二七一年、元朝が成立する。元が広大な領土をとったことで世界の歴史、そして東アジアの歴史は新たな局面を迎えることになる。今「元」と書いたが、モンゴル帝国の

うち元は中原を統治した部分のみの名称である。西方は三つの汗国が統治した。元では従来中華世界で行われてきた科挙による人材登用に限定することをしなかった。モンゴル帝国の支配領域は全ユーラシア大陸にわたったため、支那地域にも世界の文化が流れ込むことになった。元の統治はある意味では支那文化の軽視のもと成り立っていたが、それゆえに元の軍勢力が弱まればその体制は崩壊してしまうこともまた意味していた。元朝は東は朝鮮、西は東欧まで勢力圏を伸ばしたが、百年持たずに中原の支配を明け渡すことになる。元の後に成立したのは、漢民族の明朝である。

明朝の性格

紅巾の乱などの大反乱を経て、漢民族による王朝、明が建国される。しかしモンゴル帝国は滅びたわけではなくモンゴルに撤退しただけであり、また西方の汗国は存続していた。

元朝の撤退は漢民族の中原支配を復活させたが、一方で元は撤退しただけであったので明朝は自王朝の正統化を求められた。そのため明朝は万里の長城を復活させ、元が支配者としての徳を失ったから天が元に代わって王位につけたと説明した。つまり易姓革命説を公認したのである。逆にいえばこれにより明朝は元の支配の継承を主張することになった。したがって明にとつての「中国」の領域は支那地域に限定されることなく、モンゴル

帝国が征服したすべての領域に拡大されたのである。ただし明に軍勢力が足りなかったため、それは達成されることはなかった。統治体制は元朝の頃とは変わり、支那人、支那文化による統治をおこなった。科挙は行われ、支那文化単一主義的な政策を行った。モンゴルのことは「韃靼」と呼ぶようにした。これは勿論中華思想的蔑称であり、また古くからの中華思想的蔑称である「蒙古」の使用を避けようとする狙いもあった。

女真族の台頭

明朝が元朝の支配領域を継承できないままに、東方には女真族が台頭してきた。女真族はツングース系の民族で、半農半獵の民族である。高句麗も女真系の民族だという説もある。満洲地域には渤海という国も昔できており、日本との交易も盛んであった。日本が平安時代から鎌倉時代に移ろうとする頃、女真族は「金」という国を立ち上げた。それは百年余りをもってその歴史的使命を終えた。だが、女真人が東洋において歴史の主役に躍り出るのはその後であった。

ちょうど日本では徳川家康が江戸幕府を盤石ならしめたころ、女真人のヌルハチは大金国を立ち上げた。俗に「後金」と呼ばれ、のちに「清」となる国の始まりである。女真人はこれから朝鮮北部、沿海州、満洲という伝統的領域から大きく飛躍し、東洋史を作ることになる。

ヌルハチの一族は代々明に仕える役人であった。明は満洲地域においては間接的な支配にとどめ、実質的には女真人が役職を世襲する形で切り盛りしていた。そのヌルハチが彼の人生の晩年になってようやく女真人の勢力統一に成功し、明に反旗をひるがえしたのであった。ここにモンゴルに撤退して滅ぼされずにいた元の末裔モンゴル朝が関与してくる。

たびたび述べるように元が中原から撤退しても、まだモンゴルは勢力を持っていた。これを「北元」と呼ぶ。その北元も王朝が終わる時がきた。後金はモンゴルの一部を抱き込むことに成功し、東部モンゴルを平定した。そのとき北元の皇帝から元朝の玉璽を献上されている。つまり後金はモンゴル帝国の正統後継者として元朝の復活という大義名分を手に入れたのである。明朝が軍勢力のなさから支那地域に閉じこもっているうちに、元朝を継承する王朝がもう一つ誕生してしまったのだ。

清朝の成立

後金は元を継承したことで、女真人だけのものではなくなっていた。ヌルハチの息子ホンタイジは大金皇帝となった十年後、国号を「清」と改める。そして清国皇帝として即位したのである。ホンタイジが清の皇帝として即位するために、女真人、モンゴル人、漢人などに合同で推挙される形を取った。これ

により清は正式に元を継承して中原を支配するという大義名分を得たのである。ちなみにこのころより「女真人」というより「満洲人」という言い方をするようになっていく。満洲の語源は諸説あるが、文殊菩薩から来ているという説が有力なようだ。清朝の皇帝は文殊菩薩の化身であるという仏教界との集合も生まれていくのだ。これはのちのチベットの位置付けにおいても重要な意味を持つ。

清は元朝を継承したので、朝鮮を元時代の高麗と同じように属国視し、服属を要求した。しかし朝鮮は漢民族でもない王朝に服属はできないと拒否。これにより清朝から度重なる侵攻を受ける。そして朝鮮の支えとなっていた支那南部に勢力を温存していた明朝もまた、清からの攻撃を受けて衰えていく。

唐人

話をわが国に転じて、少し時間をさかのぼり豊臣秀吉の「唐人」について述べたい。「唐人」に関してはさまざまな理由が言われているが、昔から根強いのが、秀吉が愚かった、息子を失った悲しみから行っただけという説である。だがどの時代でも長の鶴の一声だけでは動かない。ましてや個人的悲しみなどで軍が動かせると思う方がおかしいのではないか。

当時アジアはスペインの脅威にさらされていた。スペインからの宣教師とは、実は侵略の先兵である。まず宣教師、次に商人、最後

に軍人というのが当時の西洋のやり口である。秀吉は海外貿易には好意的であったが、宣教師は伴天連追放令を出すなど好意的とは言えない。スペイン宣教師などは、支那人や日本人を奴隷として海外に売り飛ばしており、秀吉はそのことを知ってスペインを脅威に感じたとも言われる。スペインからの侵略に備えるために、アジアの領土を必要としたのではないだろうか。当時侵略は英雄の条件であり、多くの領地を臣下に与えられるものが称えられる時代である。

結局スペインがヨーロッパを重点的に見るよう国策を変更したこと。そしてスペイン国王が死んだことが重なり、アジアは西洋の侵略にひとまずさらされずに済んだ。だが、秀吉の唐人により明や朝鮮は衰えた。それは清朝の中原支配には大きな援護射撃となったのである。

明朝の遺臣は、元朝に続き、清朝という今まで漢民族が蔑視していた民族に中原が支配されることが我慢ならなかった。したがって（元の前の）宋の時代に成立した朱子学の名分論を強く信じ、清朝への批判を展開することになった。わが国に來朝した朱舜水などもその一人である。果たして中華世界を支配する正統性は、民族にあるのか、それとも支配領域にあるのか。それは孫文の辛亥革命まで影響を与えるのである。

元朝と明朝の統一―清朝

清朝は明を滅ぼすと首都を北京に指定した。南方はまだ明の残党が残っていたためである。台湾で鄭成功が抵抗するなどしていたが、中原の支配をもくろんでおよそ四十年で清は全支那を統一する。清は支那を統一する過程で明の王権と元の王権を継承する形となった。つまり中原の支配者であると同時に、漢民族の代表であり儒教道徳の体現者（「中国」皇帝）と東洋諸民族の征服者（元朝皇帝）の両面を兼ね備えることになった。したがって清朝は元の領土の復活をもくろみ西方に進出するのである。

まずは内蒙古にかぎらず外蒙古までも支配した。さらに今で言うところの東トルキスタンである新疆、そしてチベットをも勢力圏に飲み込んでいく。チベットでは清朝の皇帝は文殊菩薩の生まれ変わりだとしてチベットでの世俗最高君主の座に就くことになる。

ここに及んで清朝皇帝の立ち位置は、

- ・ 明朝皇帝（中華思想の中心）
- ・ 元朝皇帝（東洋の覇者）
- ・ 文殊菩薩の化身（チベット仏教での重要な支配者の一人）

といういくつもの姿を兼ねたものとなった。ここで面白いのはチベットだけは「最高指導者の一人」にすぎないということだ。現に乾隆帝とパンチェンラマの会談は「対等」の様式で行われた。これは全人類の頂点として君臨する「中華思想の中心」の姿から見れば考えられないことである。しかし清朝皇帝とい

う同一人物が異なる役割を同時並行でこなすこともあったのである。

清朝の統治体制

清朝の統治は大きく分けて直接統治と間接統治に分かれる。直接統治は万里の長城以内の「内地」、そして満洲である。間接統治は蒙古、チベット、ウイグル（新疆）である。直接統治の中でも内地と満洲は異なり、間接統治地域はそれぞれ統治文化が異なる。多元的構造を国内に持っていたのである。

内地は州県制をしいた。内地人民は満洲族が直接統治する民であり、したがって辮髪が強要された。辮髪をしない者には科擧受験資格がなかった。

満洲は八旗による統治であった。八旗とは満洲族伝統の狩獵、戦時の軍編隊のことである。モンゴルは遊牧社会に倣った部族ごとの統治が行われた。チベットでは寺院と貴族による支配が行われた。ウイグルではイスラム教を中心とした統治が行われた。

つまり清朝の支那世界は内支那と外支那に分かれることができる。内支那である満洲や内地は基本的には中華王朝社会であり、外支那であるチベットやウイグル、モンゴルは各自の伝統的統治形態にある程度のつとめたものが認められたのである。

清朝の衰退による転回

こうして地域ごとにさまざまな「顔」を使

い分けることでうまく回っていたかに見えた支那世界であるが、アヘン戦争を契機に大きく揺らぐこととなる。アヘン戦争が重要だったのは、支那伝統の朝貢的外交から近代外交への転換を余儀なくされたことになったからである。戦争に敗れることで支那は西洋に野蛮な国号をつけることができなかった。ただしそれは東洋の各国にまで適用されたわけではなかった。依然東洋の国には中華思想的外交関係が維持されたのである。しかしそれは支那の民には西洋に屈従している態度に映り、したがって清朝の体制は大きく動揺することになるのである。

その有名なものは太平天国の乱である。それ以外にも各地で蜂起がおこった。しかしこのころは清朝にも体力があり、乱の鎮圧に成功している。乱を鎮圧すると清朝は統治体制の再建に臨むことになる。一般に洋務運動と言われるのがそれである。西洋の統治形態に倣った中央集権国家を基にした国づくりを目指したのである。腐敗した州県政の再建とともに、チベットやモンゴルなどの「外地」の間接統治の見直しが始まったのである。それは西洋の流れに沿って一元的な国民国家を支那にも作ろうという試みであった。しかしそれは「外地」の人たちから見れば「中華」が自分たちの文化を圧殺する光景にも映ったのである。

改革はウイグル（新疆）から手を付けられた。直接統治と科挙の実施がウイグルでも認

められたが、反発を呼び反乱が起こった。その反省からチベットやモンゴル、満洲では大胆に手を入れることはしなかった。しかしインドを通じてイギリスがチベットに通商を求めるなどして、それに関する条約を最高指導者の一人でしかないはずの清朝が勝手に英と結ぶなど、一元化はどの地域でも徐々に始まっていた。

西洋に対しては近代的外交関係、東洋に対しては旧来の朝貢外交を行おうとしていた清朝だが、それが完全に通用しなくなったのが、日清戦争の敗北であった。日清戦争の敗北によって、良くも悪くも対等な外交関係が東洋においても行われることになった。日清戦争は朝鮮半島における影響力を争った戦争であった。日本は朝鮮半島に敵対的国家ができると安全保障がままならず、また海上交通の点でも、朝鮮半島は日本にとって重要な位置を占めていたが、それだけではなく、日清戦争は朝貢関係でない国家の対等な関係を求める戦争であった。清朝はアジアの朝貢関係の継続のため、日本はそれを破壊するため戦争を経なければならなかった。当時の日本の知識人が「文野の戦争」（文明と野蛮の戦争）と形容したのはそのためである。「文明」とは近代の対等な外交関係であり、「野蛮」とは前近代の華夷秩序的な外交関係のことである。

日清戦争に敗れた清朝はその前から行われていた制度改革をより一層進めようとする。

日本を模範として、具体的には、近代産業の発達を促す、近代教育制度導入、官僚登用法の改革、警察の導入などである。そして清朝下で欽定憲法の作成まで検討されていた。近代法体系を備え、選挙、議会、司法や地方自治さえも完備した国づくりを目指したのだ。これを主導したのは康有為らである。しかし例えば選挙に関しては詳細な戸籍がないなど、体制の不備に苦しんだ。

さらに内地以外の地域にまでこの改革は影響を与えた。満洲では漢人が次々と入植し、内地との一体化が進められた。蒙古は（新議会の）勅選議員にモンゴル王族が選ばれるなど国政への参与も求められ、また教育や鉄道の建設なども行われた。ここでも漢人が入植し、漢語使用が解禁された。チベットでも同様である。チベットは対英紛争も抱えていて、ダライラマ十三世が亡命するなど穏やかな状況ではなかったが、ここでも学校教育で漢語を普及させ、また一夫多妻制や鳥葬が禁止。儒教が導入され辮髪が強制された。チベットの文化や風俗は「野蛮」で「未開」とされた。このように周辺部にとつては清朝の一元的近代化は自分たちの文化への圧殺と表裏一体であった。康有為らの改革は清朝の領域内での国民国家を作ろうとする試みであった。漢文化を中心としながらも多民族を統合する形が模索された。

清朝の一元化への反発としての「滅満興漢」

しかし当の漢民族はこれに対して不満であった。もともと中華世界で「野蛮人」だとみなしてきた地域の人々と同一の国家を作ることに対する反発は強かった。清朝にくみする漢人と与しない漢人が出たが、いずれにしても漢人主導の政治を求める声に変わりはないかった。

より先鋭的な人間は滅満興漢を叫び清朝打倒を訴えた。その中心が孫文である。孫文は当初は清朝の改革に反発していたので漢民族のみで国を作ろうと構想していた。周辺部に關してはあまり関心が強くなかったという言いが正しいだろう。なぜなら清朝の改革に反発した漢人を味方につける必要があったからである。「漢民族主体」を叫ぶことはそのまま「清朝」という中華世界で国を作ろうとする清朝への異議申し立てとなったのである。しかし辛亥革命の成功付近から「漢民族主体」の声は変節していく。

辛亥革命が終わると、中華民國臨時政府が成立した。臨時大總統は孫文である。その臨時約法では国民は「中華人民」とされた。これは漢民族だけを国民の対象としていた頃から見て明らかに変質である。実は、孫文は、前は満洲など革命成功後は日本やロシアに売り払っても構わないと考えていた節があり、日本やロシアとも満洲の売却を約束している。もともと孫文のそうした大言壮語は有名だったようで、どこの国もともに受け取らなかったようである。とにかく孫文の考え

る統治民族は「漢民族」から「中華民族」に変質している。

「中華」民国の成立

辛亥革命の成功は、当時清朝の有力な官僚であった袁世凱の裏切りなしではなしえなかった。袁は清朝最後の皇帝である宣統帝のちの溥儀)に退位を促し、それを受け入れたことにより清朝は崩壊した。つまり中華民国は清朝から「中華」の支配者を譲渡されたことになるのである。かつて元朝が作り、清朝が継承した大帝国の「皇帝」は中華民国にながったのである。

さて、清朝から王朝を継承したことで満漢蒙回蔵の領土を合わせて一大中華民国となった(回とはウイグル、蔵とはチベットである)。もちろん宣統帝退位前から孫文などには「漢民族国家主義」から「中華民族国家主義」への移行が見られる。しかしそれは「清朝の継承」を念頭に入れ始めたからと考えてよいだろう。そこで中華民国はさきほど書いた「清朝の一元近代化」をも継承したのである。「清朝の一元近代化」とは漢民族の風土に合わせる傾向があった。つまり「中華民族国家主義」も漢民族化であると言ってよい。むしろ国の支配民族が漢民族になったことでその傾向はより露骨になったと言えるかも知れない。中華民族国家主義は建前は「五族共和」であるが、その実態は漢民族化と言えるのである。それを強力に推し進めたのは孫文を排

して権力を一手に握った袁世凱であった。

袁世凱は大總統に就任すると自身の権限を強化し、半独裁政治を作り上げた。袁は孔子廟を造るなど儒教的政策も盛り込んだ。モンゴルやチベットは特別地域として中華民国を宗主とした衛星国のような位置づけとなった。袁において中華民国の大總統は清朝皇帝と似通った多元的な像を帯びることとなった。もちろん共和制の支那の国家元首であり、さらにモンゴル王族の盟主、そしてチベット仏教の保護者。この三つの立場を併せ持った。まさに清朝皇帝を継承する形で袁は大總統になったのである。

その袁は「中華帝国皇帝」に推挙されたとして帝政復活をもくろむが、反発を買って撤回、失脚。そして失意のうちに死ぬことになる。これ以後しばらくの中華民国の大總統は求心力が低下し、支那全土を一つの権力で覆うことができなくなる。各地で軍閥が跋扈し、統一政府は有名無実化する。したがって各国は各軍閥の後援をすることで支那世界に影響力を及ぼそうとするし、また各軍閥も己の権力維持のためそれを望んだ。

この頃、支那の知識人階級は日本に留学するのが流行であった。蒋介石や戴季陶、魯迅や周作人(魯迅の弟)などもこのころの日本留学組である。これらの人々は当初非常に親日的であったが、のちに反日に転ずる人々たちである。地方の科挙失敗組が多かったこの人たちは支那に来ていた無名の日本人教師から

「近代」的思想を教わり、日本にきた。「日本は西洋思想の中継地」と捉える一方で、西洋文化とはなじまない日本文化そのものも日本留学で学んでいた。たいてい日支同盟によるアジア主義を持つて支那に帰ったのであるが、日本との国益の相違さらに共產主義への共感と反発により日支間はいまうまいかなくなる。もともと中華民国とソ連の微妙な距離感も日本側の不信を招いた節もあるようだ。

また、知識人の留学先が徐々に日本からアメリカに変わっていくあたりも親日から反日への転換として興味深い。

周辺国の動き

少しまた時間をさかのぼりこのころの支那周辺各国各地域の動きに注目したい。韓国は、日清戦争以前は閔妃(親日)と大院君(親清)で争っていた。お互いに政敵に勝つために外国の内政干渉もいとわなかった。袁世凱はすでに朝鮮の内政外交を左右するだけの権限を日清戦争前に有していた。半島内ではやや親清派が優勢だったが、日清戦争でにはんが勝ったことにより一気に親日派が優勢となった。ところが閔妃は清の勢力が弱まるとロシアに接近。ロシアの内政干渉を誘発した。日本側は金玉均や大院君などを担ぎ対抗し、外国の内政干渉を誘発してばかりの閔妃を、親日朝鮮人の指導のもと殺戮した。日露戦争で日本が勝ったとき、朝鮮半島は外国の内政干渉の誘発と戦争で焦土になっており、とても

独立できる状態ではなかった。日本は韓国併合を行い自国の領土とした。しかしそれは戦前日本の興亜論者の大きな蹉跌であった。

台湾も日清戦争の勝利で日本領となる。台湾は清末の洋務運動で近代設備の整備が始まったが洋務運動はすぐ挫折したため、実質日本主導で設備投資は行われた。総督府は当初武断政治を布いたがのちに文治政治に移行した。

日本とともに東洋世界に大きな影響を持ち始めたのがソ連である。ソ連はロシア革命を行い共產主義国家として成立。各国はシベリア出兵をしたが最終的にはソ連を承認することになる。ソ連は外蒙古の独立を支援する軍事行動を行いモンゴル人民共和国を成立させた。そこでは急進的な社会主義政策が行われ、伝統文化は破壊されていった。また中国共産党もソ連の後援で勢力を伸ばし、国民党内でもマルクス主義に影響を受ける者が出始めた。蒋介石や戴季陶がそれである。ちなみに両名はのちに強烈な反共主義者になる。余談ながら孫文は「革命外交」と称し政府が変わったのだから前王朝(清朝)の結んだ条約はすべて無効であるとして一方的に破棄を通告するような、戦争を誘発しかねないかなり乱暴なこともやっている。それをした背後にもソ連の影響があると指摘する人もいる。

チベットは相変わらずインドからくるイギリスと中華民国のはざまに挟まれて不安定な状況にあった。有力者がインドに亡命したり、軍事衝突までも経験している。

いずれにせよ中華民国の統一政府は孫文、袁

世凱の死後は内戦で実質上崩壊している状況にあり、安定した社会基盤のない不安な状況になった。政府がないということは匪賊とか馬賊というごろつきの類が跋扈し、支那朝鮮地域にきていた日本人が被害にあうことも多かった。支那地域は混沌の時代となったのである。

満蒙独立運動と軍閥の跋扈

この時期の周辺各地の歴史としては満蒙独立運動が興味深い。

辛亥革命後、宣統帝は亡命。日本租借地の旅順に逃れた。そして清朝復活を目指し蒙古王族と清朝遺臣が立ち上がったのである。

ただし日本政府はこの運動に関し支援したり中止を命じたりと二転三転している。内政外交上の情勢の変化がその原因であろう。彼等は「支那分割論」を主張。ここでいう支那分割は要するに初期の孫文同様漢民族は漢民族、他の民族は他の民族で統治すべきという発想である。

第一次満蒙独立運動は日本の参謀本部や川島浪速ら大陸浪人も支援したが日本政府が中止を命じたために頓挫した。英露との外交的妥協がその背後にあったと言われる。

第二次満蒙独立運動は袁世凱の帝政に反対する運動として行われた。しかし袁世凱の急死のため日本から資金援助が途絶え、中絶した。

支那は各軍閥が跋扈している状況だった。

日本は張作霖に肩入れしていたが、基本的に不干渉の態度であった。しかし張作霖は日本政府との取り決めを守らず自分の利益のために軍事行動を起こすなど、現地では張作霖政権に不満を漏らすものも多かった。また日本人に危害を加えていた馬族を裏で操っていたのは張作霖だと言われた。そこで張作霖は爆殺されることになった。国民革命で張作霖が負け、また蒋介石が満洲の日本利権に手を出さないことを約束したため、張作霖に肩入れしなくなったのである。

蒋介石の「国民革命」

軍閥が割拠し、なかなか統一されない支那。しかし蒋介石の荒療治によって統一されようとしていた。それが国民革命である。

蒋介石の国民革命は中国国民党を母体とした。中国国民党は国民政府が武力的に政権を掌握し、党が暫定的に独裁をおこない、憲政が指導してから党を解散するとした。これは明らかに共産党の方法論を元にした蒋介石の革命論である。蒋介石は反共の人であったが運動方法論に関しては共産主義の影響をかなり受けていることがわかる。

蔣は国共合作していた党を北伐、支那統一に向けてとともに共産党員を粛清する。共産党員の粛清を行った蔣は実質独裁を確立した。北伐では相当に乱暴な事をしつつも、張作霖爆殺事件で日本を恨んでいた張作霖の息子張学良も帰順させ、全国統一を成し遂げ

た。国民革命により党独裁体制を作り上げたのちは、孫文の三民主義に乗っ取った政治を目指した。孫文の三民主義とは「中華民族国家主義」であり「中華民族」と称して漢民族風を周辺各国に押し付ける体制であった。したがって北伐で自国領を踏み荒らされた列強と、国民革命で文化を踏み荒らされた周辺各国の利害が「蒋介石憎し」で一致することになったのである。

日支の争い

国民革命が完成すると支那はいよいよ反日にのりだした。なぜ支那が反日をしたのかについては複雑な経緯がある。反日の初めは対華二十一カ条要求もあったが、反日運動の本格化は満洲地域を日本と争ったソ連の指導で

中国共産党が騒ぎ出したというのが実情である。もちろんベルサイユ条約で示されたウィルソンの「民族自決」も影響を与えている。ただしこの時の「民族自決」は元来西洋民族限定での話である。

そうした「反日」勢力は裏で馬賊を操り日本人を殺傷する事件を頻発させた。関東軍はそれに対抗するために、居留民保護を名目として満洲事変を起こした。満洲事変は今日からみれば関東軍の拙い陰謀だったと言われかねないが、そもそも当時は自国権益も領土と同様に自衛権が持てるという時代である。従って武力攻撃の口実さえ整えば、という感覚が関東軍にあったのである。関東軍は、日

露戦争で得た満鉄の権益を自国領同様とみなしそれを軍事的に防衛する発想に立ったのである。満洲では日本の警察制度が参考にされ、安全回復に努めた。そして無政府状態になり破綻しかかっていた貨幣制度を日本からの借款で回復させた。

このような状況と満蒙独立運動が重なり、関東軍は満洲国を誕生させた。これに不満を持ったのが支那とソ連である。ソ連は満洲地域への進出を阻害され、支那は「中華民族」のイデオロギーが満洲独立で否定されてしまうからである。そこで支那事変が開戦となった。日支は必ずすると戦争状態に陥ることになってしまった。

大東亜戦争への突入、そして敗戦後

こうして日支が争うようになると、米国は中国国民党に武器を提供し、儲けるようになった。米国は、蒋介石に米国製の武器をどんどん援助し、またくず鉄の貿易を差し止めるなど日本の排除を画策した。日本は資源小国であり、またこうした援蒋ルートを断ち切るために大東亜戦争に踏み切った。

日本の敗戦後、ソ連の影響力のもと、外モンゴルは独立したが、内モンゴル、ウイグル、チベット、満洲は中華人民共和国に組み込まれた。満洲に日本が残した遺産は戦後の中華人民共和国に利用された。ウイグルやチベットは軍閥割拠時代の無政府状態と日支の戦闘により事実上の独立を手に入っていたが、戦後

毛沢東政権に再び侵略されることになる。チベットやウイグルをなぜ中華人民共和国が欲するか。領土や資源などもあるが、中華人民共和国は統治の正統性を国共内戦で中華民国に勝利したことに置いている。その中華民国は「清朝の打倒」と「統治の継承」に正統性がある。その清朝は「元朝」と「明朝」の統治の継承が正統性である。このように政治の正統性はその統治に大きな影響を与えていることを知ることは、今後の日支関係を考えるうえで重要である。

まとめ

これまで元朝以降の東洋史を眺めてきた。支那の歴史を考えると、元朝以降の王朝の正統性とその統治や領土観念に影響を与えていることを述べた。わが国も、秀吉の時代や明治以降は西洋列強の脅威に対抗するため、アジアへの進出を繰り返した歴史がある。日本のアジア進出にもそれなりの理由があったのと同様に、支那にもそれなりの理由があつて、領土にこだわっている。日支双方とも歴史認識が大きな問題となっているが、どちらかが悪逆であるからこのような事態になったわけではない。まずはそのことを双方ともに認識することが重要であろう。

一方で、欧米列強に対抗するためとはいえ、日本側には日韓併合や対華二十一カ条要求などの愚策があり、近代国民国家に変わらなければ生き残っていけなかったとはいえ、支那

にはウイグルやチベットなどへの一元統治の強制という愚策があつた。それぞれに同政策が誤りであつたという認識が必要であろう。隣り合う大国は仲が悪いのが通例とはいえ、東洋史は東洋各国がまとまれず、みすみす欧米列強の侵略を許した歴史でもある。

本紙でたびたび触れている通り、興亜論者田中逸平は、「大亜細亜」の「大」とは領土の大きさでなく、道の尊大さを以て言うとし、大亜細亜主義の主眼は、単なる亜細亜諸国の政治的外交的軍事的連帯ではなく、大道を求め、亜細亜諸民族が培った古道の覚醒にあると喝破した。亜細亜諸民族がそれぞれの古層に立ち返ることを考えたとき、元朝や清朝の統治は大いに参考になるはずに違いない。

最後に、即時に実現できるとは考えていないが、理想論として本稿そしてこれまでわたしが本紙で記してきた論考から導き出される今後のアジア秩序について具体的な構想を述べたい。

◆ 日本は対華二十一カ条要求と日韓併合が誤りであつたことを認める

◆ 現在中華人民共和国が統治している領域は、満洲、内モンゴル、ウイグル、チベット、漢の分割ないしは極度の自治を認める

◆ 上記が達成された後に「グローバル資本回避地」としてアジア各国の政治的経済的連帯を行う。ただしあくまで相互政府の連帯であり、アジア内においてもヒトモノ

カネの自由化は認めない。

◆ 各国はそれぞれの伝統文化の発揮、回復に努める。

※ 上記は大アジア研究会の見解ではなく、あくまで私見である。

『アジアの夜明け—インド独立の英雄たちと日本』 原作・草開省三／要約・原嘉陽

この度、弊会顧問の原嘉陽先生から大変興味深い文章を頂戴した。

それは、インド独立の志士で、ビハリ・ポースと共に日本我が国に亡命し、新宿中村屋でかくまわれたラル・グプタという人物を主題にした文章であり、草開省三先生の原作（歴史におきざりにされたインド独立の秘話—大アジア主義の悲願に斃れた志士グプタの残照を追って）を原先生が要約されたものである。草開先生は、大アジア主義に造詣が深く、長年教育界を通じたアジア諸国との交流事業に携わって来られた。筆者（折本）も、平成二十三年に先生の引率で韓国を訪問し、故李方子妃殿下の慰霊祭に参加したことがある。このときの経験は大変印象深く筆者の記憶に残っている。

そこで此処では原先生の許可のもと、全文を数回に分けて掲載する。

（折本）

一

昭和三十八年の秋のある日、多摩川に近い東京・世田谷の草開邸の庭先に、二人の男が入った。一人は里見。里見に連れられたもう一人は、黒い肌の老人で、ステッキをついている。両ほから下あごは見事な白いひげにつつまれ、上背のある堂々とした体躯は、一見にして西郷隆盛を思わせる。

「やあ、草開さん、おじゃまします。この人が前にお話した、ポビーさんです」

「これはこれは、よくいらつしました」
草開さんは礼を交わし、座布団をすすめた。二人は縁側に腰を掛けた。

「この人が昔上海に住み、インド独立連盟会長をされた、インド独立の影の功労者です」

その老人は、流暢な日本語で話し出した。「私はバブ・ポビーです。今から五十年ほど前に日本に亡命してきた、ビハリ・ポースとは兄弟の誓いをした者です。当時はイギリス政府から、追われ続けていました」

「おお！もしかすると、あなたはラル・グプタさんではないですか！」

グプタは一瞬たじろぎ、強く打ち消した。

「いいえ、私はそんな者ではありません」

「ビハリ・ポースさんと一緒に中村屋にいたという、グプタさんでしょう？」

グプタはしばらく沈黙し、あなたの多摩の低い山波と陽の傾きかけた空を、眺めた。

「まあ、今日は初対面です。お互い、少しづつ話していきましょう」と里見が言った。

しばらく話すうちに、草開への警戒も解けると、グプタは言った。
「草開さん、またお邪魔してもいいですか。昔の事を、誰かに話しておきたいのです」「私も、もつとお話を伺いたいものです」



来日したタゴールを囲んで（グプタは右から二人目、左端はビハリ・ボース）

明治三十二（一八九九）年、インドのカルカタ郊外の大きな邸宅の一室で、四人の立派な身なりの男が、密談していた。

インドでは二百年にわたって次第に支配権を強めてきたイギリスが、一八五七年の反英大反乱を機に直接統治し、一八七七年には、ヴィクトリア女王がインド皇帝になった。一八九八年には「民族運動の息の根を止める」治安維持法が成立した。

グプタの父は、カルカタ付近の地の王侯で、住民の福祉に力を尽くしながら、反英・

独立の運動を行っていた。

「イギリス人支配者たちは、我々独立派に対して、ますます強硬な手段をとり始めた」

「話し合いをすることさえ、危険になった」

「やはり、もつと穏やかな主張に変えて、長続きさせるほうが、いいのではないか」

グプタの父が、立ち上がって叫んだ。

「駄目だ！下手な妥協をすれば、永久に独立の可能性はない！」

「しかし、どう考えても、やつらの武力に打ち勝つ力は、今の我々にはない」

「この世の正義は、どこに消えてしまったのだ！この世は、元々、傲慢と悪智慧の支配する所だったのか！」

四人は話し合いを終え、それぞれ御者のついた（屋根のない）馬車に乗って、帰宅していった。やがてグプタの父の乗った馬車が人氣のない野中の道にさしかかった時、銃をこまえた一人の男が、馬車の二人に発砲し、グプタの父は車内にうずくまり、御者は馬車から転げ落ちた。これを見た、後を走っていた仲間の一人が、馬車から降りて、グプタの父に駆け寄った。

「しっかりしろ！」

「やられた！はやく連絡を……」

「よし、待っている！」

仲間はグプタの家に駆け込んだ。

「大変だ！ご主人様が銃で撃たれた！」

グプタの母が、続いてグプタが庭に掛け出

た。グプタはこの時、十歳の少年だった。

「すぐにご主人を、家に運ぶんだ！」

グプタたちは、象に乗って、急行した。

そしてすぐに家に連れ戻り、手当てをした

が、もはや手遅れだった。グプタの父も、それをさとったか、家族皆をそばに呼び、苦しい息をしながら、語った。

「私はもう、助からない。おそらく、すぐに家も財産も没収されるだろう。そうしたら、叔母に援助を頼むがいい」

そして、グプタの手を握りしめて、

「グプタ、おまえは私の志をついで、インドの独立のためにつくせ。海外に出るのだ。私の尊敬する友人に、ラビンドラナート・タゴールが国内、国外の同志を紹介してくれるだろう。……」

「お父さん！」

「……」

三

その後、大きな荷物を提げて、インド各地を転々とするグプタの姿があった。

父が死んでから二年後、グプタは数名の一行とともに、インドを脱出した。まず香港を訪れ、それから上海に向かい、両地でイギリス人が清国人やインド人を酷使して、我がもの顔にふるまっているのを見た。一行はさらに上海から日本に渡ろうとして、乗船場に着てきた。

「日本行きは、二等切符をください」

「お前たちはインド人か」

「そうだ」

「じゃあ、三等でがまんするんだな」

「なんだって！お金はちゃんと払うよ」

「それがいやなら、歩いて行け」

「なに！」

一人がなだめて言った。

「まあ、ここでけんかしても、損なだけだ」

一行は船底の三等室に押し込まれた。しばらくすると、隣にいた、商人らしき中国人がたどたどしい英語で話しかけてきた。

「あなたたちは、インド人だろう」

一人が答えた。

「そうだ。インドから、香港、上海を経て、日本に行くところだ」

「何しに日本に行くのだ。最近の義和団の戦いのことは知っているだろう。ドイツ、フランス、イギリス、日本、アメリカ、ロシア、オーストリア、イタリアと、八ヶ国の軍隊がわが国の民衆を殺しにやってきたんだ」

「しかし、最初にドイツと日本の外交官が殺されたのが事件の始まりと聞いているが」

「それはそうだ。だが、西洋人の侵略に負けて、政府は借金がかさみ、それを民衆に押しつけるので、皆、苦しんでいる。それで義和団が立ち上がったのだ。特にイギリスは長い間、麻薬を押し売りして儲けている。そのアヘンは、インドでとれたものだ。インド人にも責任はあるよ。日本も、西洋の真似を始めて、わが国に侵入しようとしている。」

「我々の尊敬するタゴールは、日本には立派な人も多いと言っている。これから、その人たちに会いに行くのだ」

船は横浜港に近づいていた。四五人が、甲板からあなたの陸地を眺めている。やがて、遠くに雪を抱いた富士山が、くつきりと浮かび出てきた。

「あれが富士山にちがいない。ヒマラヤの峰ほど高くないようだが、美しい姿だ。やっ」と日本に着いたな」

「それにしても、風が冷たい。日本の冬は、さぞ寒いだろう」

グプタは黙って、大人たちの会話を聞きながら、近づいてくる陸地を眺めていた。

その頃、中国の改革、革命を目指す孫文も清国政府の弾圧を逃れて、日本に来ていた。孫文は宮崎滔天、犬養毅、頭山満らの援助を得て、勇気づけられた。特に気鋭の政党政治家犬養は、孫文の日本滞在の許可を外務省からとりつけた。犬養や頭山たちは、孫文とたびたび会っては、国際問題を論議した。

「犬養さん、おかげさまで日本滞在の許可ができました」

「当然のことです。外務省は清国の背後の、ロシア、ドイツ、フランスの圧力を恐れ、清国に対しても弱腰だ。しかしこれからはあなたのような人の活躍を期待します」

「犬養君、先頃日英同盟が成立し、ロシアは満州からの撤兵を約束したが、それどころか現に兵力を増強しているそうじゃ。韓国にさ

え、脅威が及んでおる。もはや、一戦を覚悟すべき時だろう」

「しかし、相手がロシアでは、わが国の運命を決する戦争になるう。頭山君、バルチック艦隊がやって来て制海権を奪うようなことがあれば、大陸への補給路が断たれ、勝利はおぼつかなくなるぞ」

「なに、日本の海軍は、負けやせん」

「ところで、孫文さんは、今の状況をどうみるかね」

「日本政府は日英同盟を強化し、わが清国でのイギリスの経済権益を承認しようとしている。これを認めることはできない。我々の運動の目的は、自主独立の国を作ることです」

「それはもつともだが、我々は今、北からの火の粉を、振り払わねばならない。日本としては、日英同盟はやむをえない。そういえば、インドでイギリスからの独立運動をしている連中が、日本に立ち寄るそうだ。かれらにとっても、日英同盟は災いだのう」

明治三十五年、横浜に上陸したグプタたちは、東京・赤坂の「みたらし館」に宿を定め、タゴールの紹介状を頼りに、大山巖、乃木希助、頭山らを訪ねた。頭山も、喜んでかれらとの会見に応じた。

「先日、私たちは大山元帥や乃木閣下とお目にかかることができました。お二人とも、親しくお話くださり、インドの自主、独立の回復を願うと、明言しました」

「それはよかった。大山さんは特に、西郷隆

盛先生の従弟で、その教えを受けた一人です。

西郷先生は、お国のインドや清国が西洋諸国に侵略されているのを知り、西洋諸国は野蛮じゃと言われた。私も、西郷先生を最も尊敬しとります。だが、日本は日英同盟を結んだばかりだ。こしはらくは、イギリスを刺激するようなことはしにくい」

「日本にいる間は、自重します。しばらくしたら、アメリカやヨーロッパに渡り、同志たちと連絡を取り合つて運動を進めるつもりです」

「それがよろしい。西洋の勢いは、今、極まっておる。しかし、それが永久に続くことはない。好機を待つことじゃ。もつとも、白人にも賢明な人間はいるようで、義和団の乱の時の連合国の司令官、ドイツのワルデルゼーは、いかなる国も世界人口の四分の一の中国を統治できる頭脳と兵力はない、と言ったそうだ。インドも同じことだ。そのことにイギリスが気付けば良いのだが。ところで、その王子さんとは……」

「この方の父親が、イギリス官憲に殺されたのです」

「ぼくは、なんとしてでも、父の無念を晴らしたいのです！」

「それは立派な考えだ。しかしまだ、無理をしてはいかん。もっと勉強し、力を蓄えなさい。行動はそれからでも遅くない」

「……」グプタは、頭山を見つめた。

約二年日本に滞在した後、グプタたちは

ヨーロッパやアメリカの各地を、転々としていた。ある時、ロンドンでインド人留学生が反英ストライキを計画していると聞き、グプタは一人でロンドンへ向かった。

ロンドンの同志の住むアパートを訪れ、ドアをノックしようとすると、物陰から刑事が現れた。

「警察の者だが、何の用事できた」

「……」

「名前は」

「……」

「一緒に来い」

グプタは逃げようとしたが、刑事はなんなく彼をつかまえ、手錠をかけた。

警察に連行されると、手酷い取り調べを受けた。

「お前が最近、連絡を取り合っている者の、名前と住所を言え。この学生のリストの中で、知ってるいる者の名も、言うんだ」

「……」

「子供だからといって、容赦はしないぞ！」

取り調べ官はグプタを殴りつけた。彼は椅子から転げ落ちた。取り調べ官はグプタの胸ぐらをつかみ、どなった。

「さあ、全部話すんだ！」

グプタは裁判所で、禁固六年の判決を宣告された。狭い監獄の中で、寝たり起きたりして、月日が過ぎていった。

その頃、日本とロシアは戦争を始め、大陸

で死闘を繰り広げた。ある日、看守がやって来て、新聞を投げ込んで言った。

「お前にも教えてやろう。とても信じがたい話だが」

新聞は、日本の海軍が、ロシアのバルチック艦隊を撃破したことを報じていた。グプタはその記事をむさぼり読んだ。

四

刑期の途中で病院に入院した時、グプタは巧妙に病院から脱走した。この時にはグプタは二十歳を過ぎ、立派な大人になっていた。すぐにアメリカに渡り、スラム街にひそむ同志たちと再会した。

「おお、グプタ！お前がイギリスで捕まったと聞き、ずいぶん心配していたんだ。よかった！しばらく見ない間に、大人らしくなったなあ！」

「ムコジさんも、元気でよかった。今、インドの情勢はどうですか」

「まずまず、弾圧は激しくなっている。しかし彼らが乱暴になればなるほど、民衆の反感は高まっている。いまこそ、立ち上がる時なんだ。ちょうど良いところに来た。インドから亡命してきた、ラジパト・ライを紹介しよう。君に色々なことを教えてくれるだろう」

「君がグプタか。うわさには聞いていたよ。君のような人物が現われるのを、待っていたのだ。きみなら、インドでは忘れられているから、活動しやすいだろう。チャンドルナゴー

ルにいるジハリ・ボースが、インド総督を襲撃する計画を進めている。それに協力してほしい」

「ぼくはもう、一人前だ。何でもやるよ」

九年ぶりにインドもどったグプタは、さっそく、ボースとともに、爆弾製造に取り組んだ。完成した爆弾を前に、実行の密談が始まった。

「最後の問題は、この爆弾をだれかハーディング卿に投げつけるのか、だ」

「それはぜひ、ぼくにやらせてくれ」

「いや、ぼくのほうが、うまくやれるさ」

「これは、年長の、私の役目だ」

「まあまあ、それじゃあ、くじで決めたらどうだ」

「いいだろう」

くじびきをする、バサンダ・クマール・ビスワスが、当たりくじを差し出した。ボースが言った。

「よし、決まった。あとの人間はすぐに場所に隠れるんだ。グプタ、君はゴアに逃げるといい。私はとりあえず、ベナレスに逃げよう」

しばらく後、グプタがゴアの街を歩いていると、サリー姿の人が近づいてきて、ささやいた。

「グプタ！」

それが男の声だったので、グプタはぎょつとしたが、すぐにボースだとわかり、笑いだした。

「アハハハ、アハハハ。ボースさんじゃない

か！よく似合うよ」

「シート！笑うな！命懸けで、やって来たんだぞ！ハーディング卿が重傷を負ったことは知っているだろう。捜索がきつくなつて、ビスワクは捕まった」

ボースたちは、次の計画を話し合った。

「軍隊の中のインド兵が味方になって立ち上がれば、勝利は間違いない。まず、かれらを説得することだ。そして我々が決起して先頭に立てば、かれらも決断するだろう。こんどこそ、命もあぶないが、手伝ってくれるか」

もちろんさ。他に頼る人もいない。ボース、あんたを兄と思つて、ついて行くよ」

「それは有難い。私も、君を本当の弟のように思う」

決起の日を一九一五年二月二十一日、場所は北部のラホールと定め、ラホール市内の秘密本部に同志が集結したが、数日前にイギリス官憲はこれを探知して、摘発を始めた。同志の一人が秘密本部に駆け込んだ。

「大変だ！警察に知られたらしい。アジトが次々に襲われている！」

「よし、我々だけでも、決行しよう！銃をとれ！」

グプタたちはラホールのイギリス軍部隊を攻撃したが、イギリス軍はすでにこれを知つて、待ち構えていた。仲間が次々と機関銃で、なぎ倒されていった。

「突撃するぞ！」

「まて！今出ていっても、死ぬだけだ。残念

だが、退去するんだ」

二人は、僧侶に変装して逃げ続けた。「もう、インドにいるのは危険になった。グプタ、そうしたらいいのだろう」

「カルカッタまで行つて、そこからまず日本に行こう。以前、親しくなったジャストリさんがある。きつと協力してくれるだろう。日本に行けば道が開けるような気がする」

「それがいい。ロシアとの戦争に勝つた日本という国を、ぜひ見てみたい」

二人がカルカッタ行きの列車に乗っていると、警官が乗り込んできて、検問が始まった。二人は後部の車両へ移っていった。

「これからは、別行動だ。日本で、会おう」ボースがまず、列車から飛び降りた。続いてグプタが、通りかかった川に飛び込んだ。

(続く)



ジハリ・ボース

橘孝三郎の大亜細亜文明論

坪内隆彦

本稿では、農本主義思想家として知られる橘孝三郎の思想形成過程を見た上で、彼の大亜細亜文明論を紹介したい。

橘は明治二十六（一八九三）年三月十八日、水戸市上市馬口労町に父市五郎、母もんの三男として生まれた。家は紺屋業を営んでいた。幼年時代、橘は外祖父の馬之丞から論語や孟子を叩き込まれた。また、馬之丞が住んでいた瓜連には橘公ゆかりの瓜連城があり、橘は馬之丞から、耳にタコができるほど、橘公の話の聞かされたという。若くして、國體觀を培ったのである。

明治三十九年九月、橘は水戸中学に入学、当初文学に傾倒したが、やがて哲学書を読み耽るようになる。学校の授業にはほとんど出ず、英語を勉強するために図書館に通い、『ジャパンタイムズ』に挑戦、独学で英語力を身につけていった。

橘は、大正元年九月、一高文科乙類に入学、猛烈に勉強を開始した。原書を読むために、すでに身につけていた英語に加えて、ドイツ語とフランス語に取り組んだ。そのときには、通常の立身出世という目的が念頭にあったのである。

彼は語学力を生かして、デカルト、カントを経て、ヘーゲルへと進んだ。ところが、彼が到達した思想は、彼を功利主義、立身出世

主義から遠ざける結果をもたらしたのである。彼は、ロバート・オーエン、トルストイを読み、さらにウイリアム・ジェームスに行き着き、それをきっかけにアンリ・ベルクソンに惹かれるようになった。

そんな橘をとらえたのが、幼少時代からの友人林正三から紹介されたミレーの「晩鐘」だった。「晩鐘」は、教会から聞こえる夕刻のアンジェラスの鐘の音色に合わせ、死者へ祈りを捧げる農夫婦を描いた作品である。

橘は、「アンジェラス（天使）、あれこそ本当に人間の生きる道だ。ミレー、彼こそ本物の思想家なんだ。一夫一婦天地の恵みを心から受けて、心から生きぬく。心から神に感謝して生きぬく。そこには争いもない、いつわりもない。愛と誠を尽くして、神に仕える。これが真の人間のあるべき姿なんだ。できたら自分もそう生きたい。あのように生きたい」と、林に語るようになったという。

彼の価値観を大きく転換しつつあった。「一高なんか何だ」「真理に生きる自分には、名誉栄達の肩書きなんかいらぬ」という気持ちを抱くに至り、大正四年三月に一高を去った。そして、同年十二月には茨城県東茨城郡常盤村（現在の水戸市新原町）で農業を始めた。ただ、農業を始めたとはいえ、効率重視の側面もあった。だが、大正六年秋のある日、彼は周囲の農園に雑草が生えていないことに気づき、精農といわれている人たちが、どのようにして雑草を取り除いているかをじっくり

観察するようになった。雑草をなくすためには、鍬で適度の深さで土壌を耕し、それを鍬でまたすくう。それを何度も繰り返ししていた。こうして、橘は一本の鍬での作業を非効率と考えることが誤りであることを悟った。さらに彼は、農作業を通じて、ただひたすら対象に尽くせば、自然はそれに素直に応えてくれることを実感し、改めて農業に人間の生きる本当の姿を見出したのである。

橘は、昭和四年十一月二十三日、農民に愛郷精神を自覚させ、団結を促すために、愛郷会を設立した。その発足宣言は次のように謳っている。

「天地大自然の恩恵と人間同志の団結、即ち土と隣人愛、そこに我等が心から希い求むるふるさどがある。この我等が心から希い求むるふるさを求むる心こそ、我等の内に光つて我等を導く愛郷の真心に外ならない。しかもこの愛郷の心、この真心、そしてこの愛郷の真心こそは、根源に於て神より出でたものである」

そして昭和六年四月には、「日本更生の農本的大道と人生のふるさと土の愛護と兄弟愛の本義と、人間生活の本来の姿勢勤労生活とを教え且つ体得せしむべく」として愛郷塾を設立する。塾設立の趣意書は、「今様寺子屋」を起し、集めた塾生と、「真心のありたけを捧げ受けつ、共にもろ共に生きて行く」こと、中学校程度の数学・物理・化学・博物・歴史・農業大意・農業簿記・製図を教え、室外では

家畜に親しませること、さらに、「家族主義的独立小農経営法」Ⅱ「愛郷農法」の原理と實際を伝授し、日本の農村に応用さるべき農村学の大意を理解させ、芸術教育に最も意を注ぐと謳っていた。

なお晩年に橘は、『天皇論』全五卷（第一部「神武天皇論」、第二部「天智天皇論」、第三部「明治天皇論」、第四部「皇道文明優越論概説」、第五部「皇道哲学概論」）執筆に全身全霊で取り組んでゐる。松沢哲成氏が指摘するように、橘は天皇論において、「ベルクソン哲学は皇道哲学に近い」とも書いていた。



橘孝三郎

以下、橘の大亜細亜文明論を示す、『日本愛国革新本義』（建設社、昭和七年）の一節を引く。

「私は……タゴールの言葉を思ひ出します。即ち西洋文明は『都の堡壘』の内側で育つたといふ事です。換言すれば近世資本主義西洋唯物文明なる歴史社会的結晶は都市を中心として結晶されたものであるといふ事です。従つてその創造群は市民に外ならんといふ事です。同時に此資本主義西洋唯物文明は純粹に、

ヨーロッパ的なものであつて東洋のそれとは全く文明の本質形相を異ならしめて居るといふ事に注意していただくかねばなりません。

勿論東洋にも都市と称せらる可きものが古からあつたにちがいありません。然しそれは地中海沿岸に發生發達した都市とは全く本質を異ならしめておるものゝみです。又従つて西洋唯物文明の結晶の中心たりし如き都市と、その創造の原動力であつたやうな市民は存在しておらんです。かやうな点に就てもタゴールはなかなか要領のいゝ物の言ひ表はし方をしております。

彼はインドの文明は森林文明であり、インド人の生活は森林生活であつて、天地大自然の中から生れたものだといふ意味の事を申しおる。同様な事柄が支那に就ても申し得るので、支那にしろインドにしろその社会は常に大自然を基礎としておるので、換言すれば農耕を本としておるのでして、西洋の都市中心のものとは全く異なつて本質と形相とを凡ゆる点で具備しておるのであります。

フエニキアやギリシヤの古代のものから始まつて地中海沿岸に發達した都市は農耕を本として成立したのでは少しもないのです。それは：通商貿易を事として、むしろ農村又は農村国に寄生することによつて發達成熟してまいつたのであります。市民と称せらるる人々の考へ方から、政治の仕方から何から何まで農村を土台として成立して居る東洋の文明とは全く異なつておるものゝを示しておるの

であります。

タゴールが申しますにギリシア人は物を考へるのに分け隔てをするといつておりますが、味ふべき言です。此所であうした議論に深入りす可きものではございますまいが、少しく重大ですからその一例を取つて申し上げてみませう。

例へばギリシア人の言ふロゴスといふのは思弁的精神を申すので、すべて物事は弁証法的に過程し且つ創造されて行くものだといふやうな考へ方をしておつたのです。之れを東洋の方に比べると全く格段な相違が生れて来ます。例へば仏教の方のネハンの思想とか、インド教のヴェダの思想とか、儒教の仁とか、キリストの天国の福音とかいふやうな、人々が全く自他の区別を超脱して人々相互は勿論、大宇宙に渾然として融合一致し得るやうな境地を開拓する如き思想や生活経験から非常に遠いのです。

殊に文芸復興期を経て宗教改革を通過し、大陸發見から、重商主義時代に入り、やがてフランス革命からイギリス産業革命を見て近世資本主義がロンドン中心を以て發達するやうになつた近世資本主義唯物文明結晶下に於けるヨーロッパは全く東洋の文明とかけ離れたものを創り出してしまつたのであります。即ち思想に於ては唯物的個人主義思想が基調となつて、従つて唯物的個人主義的自由闘争主義となり、弱肉強食主義となる。更にこのことは理智至上主義を探り、情徳性の美

を忘れて科学は万能の威を振ひ得るものの如くに偶像化されてゆく。かくて人々は唯々物質的利害關係を中心としてのみ烏合の集團生活を通商貿易の中心地、金融の中心地を撰んで大都市的形態によつて形造るやうになると同時にこれを中心として一切の社會關係を規定しつゝ社會過程を動かすに至つたのであります。

この辺の具體的事実は何より大東京で目撃、體驗し得るのが、我々の悲しむ可き現状と申さねばならんであります。即ち我々は相愛觀念を忘れた。相互信頼を捨てた。すべては徹底せる個人主義、理智主義、營利主義、賣買主義云々、云々。そして大東京をかざる大デパートや、大新聞や、大銀行や、大ビルディング等々は何を我々に語つておるのでせうか。こんな愚問を繰り返す事は更に無礼を重ねる上に余裕なき時を潰す以外の何物でもありません。よしにいたします。

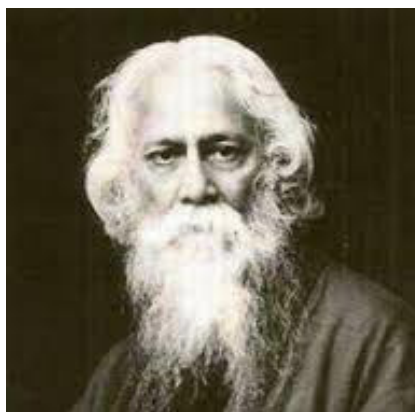
たゞ之れを、否として夢の如くではありません。でも、唐虞三代の名によつてのこされてる東洋の原始共產体の農本社会に比べましたら、人間生活の本然に訴へてどんな感じがいたしませうか。いや、原始を今問ふておる時ではありません。此悲しむ可き状態を我々は一

刻も早く何とかせねばならんであります。そして我身は先づ近世資本主義唯物文明の超克を力説高唱する次第です。それ自身東洋の真伝統精神に還ることでありませう。東洋の真伝統精神に還つて、烏合的近代世界都市中

心の資本主義社會を根本的に消解せしむるに足る、完全全体國民社會を築き上げる事より外ないと信ずる者であります。

東洋の眞精神に還つて、世界的大都市中心に動かされつゝある個人本位的烏合体的、寄合所帶的近代資本主義社會を超克、解消し得るに足る、國民本位的、共存共榮的、協同体完全國民社會を築き上げる事外ないと信ずる者であります。かくてこそまた虐げられたる東洋を西洋の手より解放し得るものであると同時に、西洋をも救済し得るものと申さねばなりません。

ここには、タゴールとともに、岡倉天心の大亞細亞文明論との共通性が確かに認められる。むしろ、橘の議論には東西文明の本質をやや単純化し過ぎてゐる部分もあるように感じるが、西洋近代文明の成り立ちとその弊害を考え、大亞細亞文明復興の筋道を考える上で、非常に示唆に富んでゐるのではなからうか。



タゴール

書評

古谷経衡著

『アメリカに喧嘩を売る国』

フィリピン大統領

ロドリゴ・ドゥテルテの政治手腕



である。そうしたフィリピンの苦悩は、好奇の目でしかドゥテルテを見ない大メディアの報道には全く登場しない。本書は、そうした既存のメディアが取り上げないドゥテルテの本質に迫る、貴重な論考である。

ドゥテルテは圧倒的なフィリピン国民の支持により、大統領に就いた。そして91%とも言われる高い支持率に支えられている。この高支持率は、彼の故郷でもあるダバオ市長時代の実績から来るものである。ドゥテルテは、30年近くもの長きにわたりダバオ市の市長を務め、人々を苦しめていた麻薬や犯罪を一掃した。ダバオのタクシードライバーは、途上国にありがちなぼったくりが一切ないという。ドゥテルテの政治が、それをもたらしたのである。ダバオには道端にゴミも落ちておらず、下水道も整備された清潔な街となった。こうした市長時代の輝かしい実績が、人々の期待となっているのである。

本書の「目玉」の一つがドゥテルテの自宅訪問である。さすがに中には入れなかったようだが、外観は取材されており、それが長年権力者の座にあった人物とは思えないほどの質素なものであることがよくわかる。その庶民性、飾り気のなさがフィリピン国民に愛されたのであろうということがよくわかる。参考のために比較材料として紹介されている、アメリカのトランプ、クリントン、アル・ゴアの自宅の、なんと豪勢かつ広大で贅をつくしていることか！彼らが一握

りのエスタブリッシュで、庶民の生活などまるで分らない人物であることがこれだけでも明白なのである（トランプは何度も破産も経験している人物なので少し違うかもしれないし、そこがアメリカ国民に支持された所以でもあるのだろうか）。ドゥテルテの暴言癖も、いわば下町のオヤジの失言みたいなもので、それを根拠にドゥテルテを支持している国民はいない。十歳の子供までドラッグに手を出して破滅する国であったフィリピンを、この人ならば真に救ってくれる。そうした人々の思いが強力な支持基盤なのである。また、麻薬や犯罪の温床である貧富の格差や貧困への不満、汚職の横行への憤りがドゥテルテの「世直し」への大きな期待となっているのである。ドゥテルテは確かに強権的で、やりすぎなどところもある。しかしこうしたドゥテルテの実績や、人々の期待を知らないでドゥテルテを色物扱いするのは、端的に言って先進国の傲慢でしかない。ドゥテルテに失礼というべきである。

本書に注文したい点がないわけではない。例えばドゥテルテは南シナ海における中華人民共和国との争いに対して、米国の介入を嫌い、話題になった。そうしたドゥテルテの安全保障政策については、「はじめに」と「おわりに」で断片的に触れられるのみである。ドゥテルテが構想する国際秩序については、より深く知りたい面であった。また、ドゥテルテは非常な親日家で、長年ドゥテルテと交

友のある日本人もいる。東日本大震災のときには被災者の受け入れを表明し、市長時代にはダバオのミントールに私費で日本の戦没者を祀る日本人墓地に記念碑を建てたという話もある。天皇陛下への畏敬の念も持っていると言われる。残念ながら三笠宮殿下が逝去されたため天皇陛下との会見は実現されなかったが、その際にも「陛下の深い悲しみを共有するとともに、心から哀悼を表します」として、「いつか陛下とお会いする機会があると確信しています」と述べたという。おそらく緊急出版が決まり、急ぎ取材を重ねたためではあるが、こうしたドゥテルテの新日家の側面が出てこないのは非常に残念である。

ドゥテルテは安倍首相との会見で、中華人民共和国との関係に言及し、「日本とフィリピンは同じような状況にある」「われわれは常に日本側に立つ」とメッセージを発している。「オバマは地獄に落ちろ」と言い、習近平との会談ではガムを噛みながら応じたドゥテルテ。だがドゥテルテは日本に対してはそれらの態度とは異なる。ドゥテルテは今後のアジアを考える上では避けては通れない人物である。ドゥテルテを、フィリピンを良く知ったうえで、今後のアジア関係、日米関係を考えなくてはならないのである。

(文・小野耕資)

史料・日清貿易研究所 開所式における 荒尾精所長訓示

日清貿易研究所は、明治二十三年（一八九〇）年九月に、興亜の先覚者・荒尾精が上海に設立した興亜組織である。

中国における荒尾の活動は、目録「精録水」を製造販売する「樂善堂」を経営する岸田吟香との出会いから始まる。岸田は明治十三年に上海に支店を開設、同十七年には漢口にも支店を設けた。荒尾は明治十九年に中国を訪れ、岸田と意気投合、ともに東亜百年の長計のために協力することを約束した。



岸田吟香

こうして、漢口樂善堂には三十名近くの興亜の志士たちが次々と集結した。まず、井深彦三郎、高橋謙、宗方小太郎、山内巖らが集まった。さらに、山崎羔三郎、片岡敏彦、石川伍一、藤島武彦、白井新太郎、中野二郎、浦敏一、北御門松二郎、中西正樹、廣岡安太、

浅野徳蔵、松田満雄、前田彪、河原角次郎といった面々が訪ねて来た。彼らは、玄洋社のほか、上海の東洋学館の人脈、熊本の佐々友房の人脈、そして明治十六年に芝罘（現煙台）初代領事として赴任し、清国改造の志を抱いていた南部次郎の人脈などからなる。

明治二十二年四月、荒尾は樂善堂を中野二郎らの同志にまかせて東京に戻り、ただちに四年間の経験とその間に収集した情報をまとめて参謀本部に復命書を提出した。復命書において、荒尾は清国の状況を詳細に分析した上で、清国と戦うも和するも、ともに問題があり、革命勢力と結んで滅清興漢の義兵を起こし、革命政府と同盟を結んで東洋の勢を興すことが重要だと主張している。

彼は、欧米の進出に備えるには、日清が互いに貿易を盛んに行なうことによつて経済力をつけ（貿易富国）、日清が連携して列強に対抗すべきである（協同防衛）との考えを持っていた。つまり、日清貿易拡大のための人材養成として構想されたのが、日清貿易研究所である。日清貿易に従事する人材養成の機関を上海に設けようというのである。ただし荒尾は、日清にとどまらず、アジア全域を視野に入れていた。明治二十二年十二月に生徒募集のため遊説した博多で行った演説で、次のように語っている。

「是よりは更に一步を進め、亜細亜貿易協會を設立して、之に亜細亜貿易研究所を附属し、総ての手続きは、日清貿易協会、並び

に日清貿易研究所に於けるの順序を以てして、其研究生を日本人のみに限らず、普く亜細亜州内の諸邦、即ち支那、朝鮮、安南、暹羅、緬甸、印度等より、俊秀の青年を募り、其学期は前同断三箇年として、各港輸出入の取調より、各地の物産研究等をなさしめ、卒業の上は、初めて実地の演劇に着手し、各国共に亜細亜貿易協會の支店を置き、右の支店には必ず日本人一名を添え、其国の研究生と共に運動せしめます」（『巨人荒尾精』四十五、四十六頁）。

以下の日清貿易研究所校歌にも、興亜の志が窺われる。

秋津島根の益荒男が
百と五十うち揃ひ
大海原に乗り出せば
遠く唐土の呉の空に
来たりし心人間はば
見よ見よ他日その時を
雲は晴れたり空澄みて
亜細亜の月も照り出でん

一年に及ぶ遊説による生徒募集の結果、全国から三百名もの青年が日清貿易研究所を志願したが、収容能力の限界から百五十名が選ばれた。明治二十三年九月三日、荒尾は百五十人の生徒と研究所員数十人と共に横浜から横浜丸に乗り込み、同月九日上海に降り立った。そして、九月二十日に開所式が挙行

された。訓示はこのときのものである。

日清貿易研究所の科目は清語学、英語学、商業地理、支那商業史、簿記学、商業算、商業実習、貿易学、経済学、法律学、和漢文学、柔道体操など。

日清貿易研究所開所式における

荒尾精所長訓示

我國貿易の道開けてより四十年外船の來て我港に出入するもの年に多きを加ふ有無相通ずるの道益々盛なるに至るや應さに遠きにあらざるべし然れども各國對峙輪輸相制するの秋に際し世界の經濟をして重きを我國の一挙一動に措かしめ商業の全權を収めて我掌中に歸せんと欲せば必ずや東洋を凌駕し歐米を睥睨し嚴然として商權を洋の東西に振ふの索を養はざるべからず我國の志士苟も國家經濟の前途を慮るもの亦皆此に見る所なきにあらず然れども我國維新以來日尚淺く瘡痍未だ癒へざるに國家の多事なるに遭遇し士民殆んど奔命に疲憊し空しく此志を抱て果さざるもの幾許ぞや其極實業の方針鞏固ならず遂に姑息一時を苟偷するの弊習を醸成するに至れり

余久しく清國に遊び彼我貿易の大勢を觀察し歸朝の後各府縣を周遊し大に感ずる所あり曰く此勢を振はんと欲せば須く先づ基本を治めざるべからず本とは何ぞや外に貿

易の大勢に通曉して贏輸を未然に決するの索を養ひ内は國產の不振を作興して実業の方針を鞏固ならしむるの道を開く是なり此本治らざれば此姑息遂に改むべからず此姑息矯むべからざれば豈能く外夷を掣肘して商權を振ふを得んや此に於てか不敏を顧みず遂に貿易研究所の設立を企つるに至れり此舉幸に世の容るゝ所となり有志諸氏の贊助と所員諸氏の勉勵とに因り遂に期年ならずして起業の功を成すことを得たり

余諸氏と共に父母の國を去てより既に二旬内外の準備略整ひ茲に明治二十三年九月二十日を以て開所式を擧ぐるに至れり此舉に際し余は豫め諸君に請はざるを得ざるものあり夫れ清國は郷土を離るゝこと遠からず僅に一葦水の間のみ然れども今諸君父兄の心情を沈思するときは割くべからざるの慈愛を割て日夕怡々たる顔貌を見ること能はざるの悲哀を忍び奮然として諸君を海外に遊ばしむる所以のものは是れ必ず大に此より忍びざるものあるにあらざるを得んや

今日我國商業の状況を見るときは猶彼の櫓櫓の間に苦めらるゝ疲馬の觀なきにあらず汲々として尚ほ食に飽かず常に命を外商に受くるの辱に遇ふ諸君に許すに此行を以てするものは彼を以て是に易へ難ければなり今よりして後諸君負ふ所の任豈に重からずや若し他日其任に堪ゆるの材を為さずんば諸君何の面目か父母の國に歸るを得ん請ふ能く父兄の意を體し寤寐必ず之を忘るゝこと勿れ

と勿れ

既に設立の趣旨を陳べ亦諸君の注意を請へり希くは諸君業を勉めよ我國經濟の現況は朽索の千鈞を引くに似たり今此頹勢を挽回し富強の基を開かんとせば必ずや商權の恢復より急なるはなし商權の恢復は彼我貿易の大勢に通ずると實業の振作とより急なるはなし而して此責を負ふ者は諸君にあらずして誰ぞや諸君今より俛焉其業に勤め他日業成るの後各其長ずる所に從て既成の材を奮はゞ歐米を叱咤し東洋を風靡する素も此に始めて其萌芽を出し本所設立の業も亦徒勞に属せざるを得ん乎今開所式を擧ぐるに當り暫らく諸君に望む所を陳ぶること此の如しと云爾

明治二十三年九月二十日

荒尾精



荒尾精

連載 大亜細亜医学の中の日本③

坪内隆彦

本連載初回で、欽明天皇（在位…五三九～五七一年）の時代に、百濟から医博士が来日していたことを紹介した。実は、この時代には中国からも医学知識がもたらされていた。

中国では五八一年に隋が建国されるが、五六二年に南北朝時代の呉から知聡という人物が日本に帰化していたのである。彼がもたらしたのが、『甲乙經』などの医学書百六十余巻だった。これが日本に中国医学が紹介された最初である。『甲乙經』は、三世紀半ばに、皇甫謐が針灸治療に関する幅広い内容をまとめたもの。そこには、針灸経穴を明確にした「明堂図」などが含まれている。

六〇七年、推古天皇は小野妹子を遣隋使として派遣した。これに同行したのが恵日、福田らである。

恵日は、『続日本紀』天平宝字二（七五八）年四月己巳条によると、もと高句麗人で雄略朝に百濟から渡来した徳来という技術者の五世の孫で、中国の医術を習得して薬師の姓を与えられ、子孫は難波薬師を称したという。福田は、渡来系氏族・倭漢直である。倭漢直は、応神天皇のとき来朝した阿知使主の子孫で、大和国高市郡を本拠とし、五世紀半頃から文筆、工芸などに携わる渡来人を管轄する伴造を務めていた。

恵日と福田は、推古三十一（六六三）年に、

新羅使とともに帰国した。この間、六一八年に隋が滅び、唐が建国されている。恵日と福田は、「唐は法式備わり定まれる珍しい国であるので、常に通うべきである」と建言している。

このとき、彼らが伝えたのが中国の隋の医家・巢元方（そうげんほう）の『諸病源候論』である。同書は、広く病名を挙げ、症候を記述し、病源を論じたもの。隋以前には、病因証候学を扱った書物はなかった。そこで、巢元方は煬帝に上奏し、『諸病源候論』作成を提案、勅命によってその計画を実行した。これまでの医学書を整理し、明らかにされていなかった疾病を研究して、六一〇年に完成した。『隋煬帝開河記』には、巢元方が重病人を「風逆病」と診断し、羊肉の入った処方を与え、数日で回復させたというエピソードが記されている。

恵日はその後、遣唐使として二度唐に渡り、後漢時代の医師・張機（張仲景）らの著書をもたらしした。



張機

張機は、医聖とも称えられる医師である。

青年時代に同郷の張伯祖から医術を学んだ。

彼は、有能な官僚であったが、後漢末期の混乱とそれに追い討ちをかける疫病の蔓延に心を痛め、官を退いて医学の研鑽に務めることを決意した。古代から伝わる医書の知識と自らの経験を加えて彼が著したのが『傷寒雜病論』である。その序文で張機は次のように書いている。

〈余の一族は、もともと二百人にあまるほどいたが、建安元（一九六）年から十年もたたないのに、死亡するものがその三分の二に達した。そしてそのうち十分の七は傷寒にかかって死んだのだ。こうして死亡者の続出したこと、年若くして死んでゆく人々を救う手段のなかったことを嘆じ、発奮して「傷寒雜病論」を著した〉

後に、同書は傷寒（急性熱性病）については『傷寒論』、雜病（慢性病）については『金匱要略』に分割されたとされている。『傷寒雜病論』は、昭和五十六年に日本漢方協会から復刻されている。その序文で、日本漢方医学研究所理事長の伊藤清夫氏は次のように書いている。

『傷寒論（古くは傷寒雜病論）』『黄帝内經素問』『神農本草經』は、中国医学の三大古典であることは、昔も今も変わりはない。その中で『傷寒論』は中医学を学ぶ者にとって、研究すべき必須の古典であるという。現在の中国においても、『傷寒論』関係の出版が続々と行なわれ、その研究の重要さがうか

がわれる。

さて、日本の漢方、特に古方派漢方は、傷寒、金匱の研究から出発していることは周知の通りである。『傷寒論』は『傷寒論』の理論で解釈するという考え方、それに腹診の発達が加わり、親験実施を精神とした古方派漢方は中医学と違う発展をとげて今日に至っている。『傷寒論』の最も古いとみられる章句（古

方派はこれを本文と称する）は、病気の症状、経過を述べ、それに対する治療法（薬方）をあげているだけで、特別の理屈で説明していない。もしその臨床的観察が正しく、適用した薬方が有効であるなら、後世の人がそれを追試しても同じ効果をあげ得る筈である。事実を正しく把握していたら、二千年を経ても、その事実には変りはない筈である。後世、何

千何万の人が『傷寒論』を追試して、『傷寒論』の事実の把握の正しさを確認してきたわけ、これが『傷寒論』を今日に至るまで、最も価値ある医書として継承してきた所以であると考ええる。西洋医学を学んだ者も、『傷寒論』を研究し理解すれば、臨床に応用してその効果を確認し得るのであるが、これは『傷寒論』が正しく事実に立脚していると考えれば、了解できることである。従って西洋医学を学ぶ者にも、『傷寒論』研究は裨益するところが大いと考ええる。

以上、『傷寒論』は、日本の漢方にとっても、中医学にとつても、研究すべき必須の原典であることは論をまたない。しかし漢方が西洋

医学的治療と伍して、日本の医療界に貢献するためには、今後の『傷寒論』研究は、科学的実証精神に立脚すべきである。』

中国医学の三大古典の一つを著した張機の知識は、七世紀初めには日本にもたらされ、今日もなお日本の医学界で重要な位置を占めているのである。

大アジア研究会 漢語勉強会について

大アジア研究会では、平成二十八年七月から漢語（北京語）の勉強会を毎月行っている。

大アジア研究会に参集している同人は中国共産党、中華人民共和国と政治的見解は相容れませんが、「相手のことを知らなければならぬ」という思いから、少しずつではありますが学び始めております。

漢語を学ぶ中で、

①漢語の発音と、日本の正仮名遣いでの漢字の読み方の関係性があること

②漢語の語順は一般的には日本語と違い、英語と似通っているなどと言われるが、実際は日本語の感覚に近いことも多いこと

など、学ぶことで発見があり、興味深いものとなっております。

ゆくゆくは戦前日本の興亜論者が残した史跡などを訪ねることを目標としております。

●これまでの開催日（直近三回）

平成二十九年二月十八日

三月二十六日

四月九日

●次回開催 五月二十一日

崎門学研究会定例勉強会のお知らせ

弊会の姉妹団体である崎門学研究会が主宰する勉強会のお知らせです。以下に転載します。

第五回『保建大記』を読む会のお知らせ

『保建大記』は、崎門の栗山潜鋒（一六七一～一七〇六）が元禄二年（一六八九年）に著した書であり、『打聞』は、同じく崎門の谷秦山が『保建大記』を注釈した講義の筆録です。崎門学では、この『保建大記』を北畠親房の『神皇正統記』と並ぶ必読文献に位置づけております。そこでこの度弊会では本書『保建大記』の読書会を開催致します。詳細は次の通りです。

○日時 平成二十九年六月四日（日曜日）

午後二時開始

○場所 弊会事務所（〒二七九の〇〇〇一 千葉県浦安市当代島一の三の二九アイエムビル 五階）

○連絡先 〇九〇（一八四七） 一六二七

○使用するテキスト 『保建大記打聞編注』（杉崎仁編注、平成二二年、勉誠出版）